

特 116
185

天命
造化之樞機
壹卷

~~116
185~~



始



特116
185

天命
理數

造化之樞機

天文館主編著

壹之卷

矢島誠進堂發行

大正
10 8. 5
丙交

造化



心之公

心之公

理

理

理

印

新編
古今圖書集成



原序

竊惟人得天地之理以成性得天地之氣以成形其性同其形同則其出處亦宜皆同也何富貴貧賤窮通壽夭萬有不齊豈天之有意豐嗇耶抑亦人之自致耶是不然蓋人之形性雖同而命之五行不能則一故仲尼不得位李廣不封侯顏回宜壽而不壽盜跖宜夭而不夭天何心哉人何能哉或者曰天無與焉人無與焉吾固信矣而今日命者何每見術士許人富者以貧終論人賤者以貴顯豈命之說亦渺茫耶又不然蓋貧終者正命貧也貴顯者正

命貴也。書有言曰。命運多刑。故招無壽之妻妾。命運當貴。必生及第之兒男。所謂術士之許。亦有左者。術士之論。亦有差者。非命之渺茫也。繇命家之書。不得其真。差訛相傳。故也。予也。雖涉江湖。有年。亦不能無許。左論差之。弊心切苦焉。幸游武當。得遇霞陽老師。朝夕講論。袖出一帙。顏曰。命學全書。示予。予拜而閱之。見其所論子平。則去留舒配之理。曉然如揭。日月於中天。比之醉醒。予不少讓焉。所論五星。則遲留伏逆之說。宛若孔夫子之謂視。諸斯比之。古之一行。耶律琴堂指南。瑯玕喬拗。轆轤果老。演禽。亦不出

其右。學者得是書。而論命。吾知其所言。富貴貧賤窮通壽夭與。夫吉凶禍福。莫不響應焉。有許之左。而論之差者。耶。予常欲秘之。因賈人懇子再四。遂不得已。付之鐫。而假管成子於前。

洪都羊城汝川門人

雲陽朱會龍拜撰

緒言

窈に按ずるに儒教の傳來已に久し徳川家康公曰く人以て道を知らずんは在るへからず應仁以還は天下唯利を視るを主と爲し皆道を知らざるに坐す苟も道知らんと欲せば聖經を捨て奚に適んと是に於て世々儒教を盛んに講し文教大に興起せり八世吉宗公は天文曆算に殊に心を用ひ斯道に精通者を廣く召し崎陽の西川恕見等出て甚た盛旺と成れり予適々本卷を繙に當り天學の術語等に難解多し是に由て古聖の天文書を研究せしに儒教の根源は宇宙を基礎と爲すを紀し在り其の原ぬるに伏羲氏仰俯して天象の形氣と河圖の數に由て八卦を畫し

天學は本と形
氣と命理との
二種に大別す

〇緒言

命理を數上に顯し、曆紀の數は其れ此に肇る、黃帝は形氣
と命理を論し、曆を作る、堯の天下に王たるや、曆象を正し
人時を授く、舜に禪に及て言曰く、天の曆數は爾の躬に在
り、蓋し曆を治め時を明に爲す、帝王の重務なりと宣す、舜
の世に測器を完備し、後世に範を垂る、堯舜の遺法、渾天の
一流是なり、孔子は命理を以て人道を専ら教ふ、是に由て
之を觀は、夫子の經書を刪定し、玉ふ人道の教義は、天學の
命理なる事明なり、殊に繫辭傳の如は、天地人の三道の廣
大備ると、嚴然釋し有と雖も、單に占筮書と爲す者多か、如
し、本卷は命理學にて、天文推歩の法に倣ひ、日月五星等の
運旋に由て、人事の禍福を専ら測るに在り、故に上は貴族
より下は雜職の細民に至るの斷命法備る、故に時勢は何

二

に變遷進化爲すも、日月に變り無く、故に此軌道を脱る者
無し、其徵は其職務の何たるを問す、榮達の志望を遂げ、小
は閭里に名を揚げ、大は海外に聲譽を得る者は、是皆天命
を稟る處に符合す、而るに之に反し、失敗落魄の者に於て
も亦然り、此等は、一も之に洩る者無しとす、
近時の識者の説の如く、啻に職務に克己勵行せは發達し、
社會に名を得るとは、斷し難し、人の其職に克己勵行爲す
は、常務の行動のみと想ふ、故に都鄙の別無く、正道を踐む
誠實者に、漸く生活爲すに過さる者有り、或は不佻多く寡
鰥孤獨に、零落の薄倖者も、少なからず、或は衆人の指彈を
受る者に、往々鉅萬の大富と成る者有り、故に財運の有無
は、是即ち其人に備る者にて、別論なり、現今の風潮のたる

〇緒言

三

繫辭に曰く
 聖人之大寶曰
 位何以守位
 曰人何以聚
 人曰財理財
 正辭禁民
 非曰義又曰
 善不積不足
 以成名惡不
 積不足以滅
 身云云の章
 を見よ實に
 千歳の金言と
 爲さざる乎
 噫

利のみに奔り道の何たるを講ずる者少く、社會に人望を
 得し者か、厭世の結果河井に投し自殺し自縊者等在り、或
 は生辱を曝すに縲紲を耻を甘受爲すに至る者、在り、此等
 は皆自ら災殃を招く者の類甚多く、一一列舉に遑無し、近
 來特に時弊累起して止す、此故に盛衰一層劇烈の感在り、
 將亦自ら求めざるも、災厄多く、兵亡し、電雷に打死者、獸蟲
 の毒に斃死者在り、或は冤罪を受る者、或は又火水難等に
 罹る者、在り、此等は總て天命に印する處、在るを以て榮達
 者及ひ百難に遭遇者は、何れも襍襪の中に測知るを得る、
 是即ち斯術の特色なり、
 古今に周易を弄者は、小事は測知る者在るも、貧福貴賤及
 ひ前述の禍福の大事は、縱令卦面に現實を示すも、筮者の

智能に考察爲す能さる事多し、予も象數の占法を攷究す
 る多年なるも、廣くして力に及はず、然るに本卷を精讀し
 て想に、故人か象數占法の不傳を歎せしも、或は之を兼用
 せしものに非ざる乎、故に有徳者か儒教の修身齊家の道
 を講し、傍ら斯道に精通し、其吉凶を告るに鬼神の機に達
 し、人生の天命の何たるを知らしめ、是即ち世道人心に
 益有と爲す、識者は奈何と爲す乎、是原と理數の運用にて
 斯の如し、故に普通數理に準しく、研究者に巧拙無きか如
 し、素より流布の占術の如く、簡便ならず、繁雜なるは勢ひ
 免れざる自然の數なり、
 凡そ人生に常識を具る者に、人格名譽を欲せざる者無く、
 貴重の性命を不知者無きも、然るに欲の爲に一世を賣る

のみならず祖先を辱るに至る所謂小人蓋し些少からず之に由て何職者を問す斯術を奨励せんと欲す要は脩身に有り且又人生の趣味を知る捷徑なり予は固より淺學疲駑を顧はず人世の禍福を完全に知る法術を求め是に幾多の星霜を経過し暑寒と奮闘し貧苦と劇戦して年中無休暇に専ら研鑽し實に艱苦を嘗め竭して漸く此の術の運用を爲すに到れり宇宙に一大真理有るを感ずると雖も而るに疲馬に重荷なると將亦不徳加るに晩年に及て躬ら運用し世益を謀る能はざるを遺憾とす故に家傳等に爲す意無し是に於て初學に運用を主要とし這回發行し同好士に頒布せんと欲す學者は章句に拘泥せず専ら運用に通ずるを務め精研熟練して天文玄象の妙機に

達し奥蘊を窮め儒教を併用して修身齊家を本とし家運の興隆を謀り或は天稟の才幹を發揮し國家に竭し或は廣く人の災厄を救済爲す有徳の士を埃つ切望なり予は唯先驅に雜草荆棘の叢生在るを刈り道を拓て漸く通路を開設したる如きに過ぎざる矣

後學乾齊山岸愚翁謹識

凡例

一本書は天文推歩の法に倣ひ以て、人世に現實の禍福を
 推知する、奥蘊の法を簡易に知悉の書なり、凡そ人生は
 貴賤賢愚在て、上は貴族より下は勞働生活者に至る、其
 中に廟堂の有司以下、百般の職務に従事して、榮達と窮
 迫者と、長壽の天命者の差有り、各榮枯盛衰の在るは、所
 謂天命に享る處にして、是即ち天道の配劑に出づ、其神
 秘を知る、恰も掌中の物を觀るか如し、故に天命理數造
 化之樞機と題したり、
 夫れ天文學は、原と算數と測器を用ひ、専門家の業に屬
 し、實用に懸隔と想ひ度外視者多し、斯學は三種に大別

天學の實用に
 緊要なる所以
 は、第五卷に
 録す、

し、一は日月五星等を觀測し、曆象等を專務と爲し、一は風雨時候等の氣象を觀測爲し、一は命理の學にて、儒教及ひ人生の百般を專ら知る本卷是なり、
 一本書は首に天學梗要を掲げ、次に日月五星等星の行躔度等の命理學に關する一切の要領を叙述し、推歩法の奧蘊を望斗僊經、王衡經、及ひ琴堂指金等の詩賦歌に作たる秘訣を網羅し、反覆懇切に解釋有り、雖も而るに現時の初學は漢字を苦む者多し、故に一層平易に詳解せんと欲せしも、更に熟考爲すに、斯道を能く精研し、熟練に至れば、却て繁雜に涉るを厭ふ處在るを以て、小注を附し、運用に支障無きを主と爲し、更に第一卷より第四卷に至る疑問に屬す事項を摘撰、注解して、第五卷に詳

述す、然れとも本卷を能く熟習して、運用の自在に成るを努むへし、

一原書は支那唐の世に創始の僊經等にて、後に諸説を蒐輯て、命學全書と題すれども、廣く傳るを許さず、特に人撰相傳したる秘訣なり、光緒三丁丑歲に始て新鐫成れり、今を距る三十餘年にして、我國の先輩は之を知る者無し、予曩に原書を獲て精讀し、天文玄妙の一大眞理在るを知り、淺學陋識を顧す、専心研究して、漸く運用爲すに至り、國文に譯し、運用法を附して、童蒙に讀易からしむ、然るに専ら命理のみを説て、天象の七曜列宿等の運旋に關する天學の大意を載せざるを以て、其梗要を首に掲げ、更に第五卷に於て觀測の大意及ひ日月蝕等の緊

要の事項を附記したり、
 一 近來四柱推命術は、世人禍福を密と想も、本書の一部分にて、淵海子平と題し、崇禎七甲戌年に梓行成る、今距る二百七十餘年前にて、我國へ舶來の歲月未詳なるも、予推命寶鑑と題し發行せり、今本卷と對照すれば、其組織簡易なるも、未だ人事百般の要を竭す能はざる憾在り、之を比較せば、科學の中學程度の感在り、然に本卷は天文玄象の高尙の理なれば、學者に繁雜なるゆえ、一讀の下に解決難しと雖も、我國開闢以來に聞見者無き、奇妙の法術を究るには、從て至難は當然の理數にして、殆と大學程度の講義との差異在り、之に由て推命術を知る者か、進て講究爲すは順序にして、所謂登高自卑の如し、

一本卷の推歩術たる、實に造化の玄機を知る法にて、人世の終始を細密に推知するに、四柱推命の如く、先づ生年月日時の干支を知り、特に生時を以て安命宮安身宮を定るに在り、故に生時は頗る緊要なり、若し不明の者は命身の二宮を定難し、故に不明者は、他法に由る外に道無し、其年月日時の干支の配當法は、既に年鑑の發刊し、在れば、之に就て看るへし、

一天文玄象の理を學者は、故人の教訓に圖を熟習に在りと謂へり、故に渾象諸圖を些か附し、本卷必要の百刻日月相會總圖等の諸圖を能く熟知し、而る後に本文の精讀を要す、諸圖を書中に挿入せざるは、練習の際に一一對照の便を謀り、別に製する所以なり、

一各人の運命の斷定法は、七政四餘七政とは日月木金水火土を云、四餘とは計都羅喉紫炁孛星を云、二十八宿度十二支宮を以て、安命宮安身宮を定め、且亦命宮財帛官祿等の十二宮の起例在り、更に書中に凡例及ひ局立貢命の例徴を掲げ、運用の方法に係る秘訣を輯めたり、

一本卷の主要たる五星列宿は各五行の性質備り、星曜各性質を異るも、畢竟五行木金水火土の五つに歸す、其性質を區分し在り、且つ運用法の相生相尅の理は、往古より傳來の法にて、衆人之を知る、而るに制伏制化の理を用ゆる故、單純ならず頗る緻密にして、高尚の理論に涉るを以て、智者に非らざる者は、一層精讀を要すと想ふ、予は固より陋識にて、其理を明むるに甚だ困難せり、故

に本卷に漏たるは第五卷に詳述を載す、先づ此書を充分に研磨し、仔細に玩味すへし、聖賢曰く、人一能之、百能之、人十能之、己千之、果能此道矣と在り、此言を能く服膺爲さるを得ず、師に就學者は、日に少許つゝ、習得して、遂に難問題を解決爲すと雖も、獨學は疾く通讀爲す故、却て全體の解決か遅々たる處在り、畢竟潛心力學を奨励せんと欲するなり、

一推歩術は算術の高尚の數理を究め、之か運用爲すへきを、僅に十千十二支を五行に配し、數理を含有せしめ、運用を簡易に知る、工風を凝したるものなり、高尚至難なれとも、之か運用は常識有る者に不可能の業に非らず、其干支に數源を寫したる詳解は、己に推命寶鑑に載す

就を見るへし、
 一第一卷は命理學の主要なる太陽太陰より五星四餘の
 行度に就て詳論し次に七政四餘變曜貴賤格局分野圖
 解は十二宮に七政四餘の星曜が運行の宮に由て吉曜
 が變曜して凶星と化し凶曜の吉星と化す在此故に
 人生を統轄爲す星曜の變化に因て人に貴賤の格局を
 設く分野とは一國を天象に擬へ二十八宿度を八方に
 配し其州國を割當たるを之を分野と爲す次に七政四
 餘入廟歌訣は星曜に各相生の愛方在り其方に入れば
 威力旺盛なる故人生に幸福を享受べし若し相尅の忌
 方に入れば災厄に遇を知るなり次に神煞圖は六十年
 間の干支に吉神及凶煞共に配當し一目に毎年の神煞

を知り更に十二宮の吉凶神煞に因て善惡の事故の現
 實等を詳細に註解し在り、
 一天盤地盤人盤の三圖は是即ち運命斷定法の根元に屬
 せり故に此圖の運用を能く熟習爲すべし次に九曜喜
 忌定局圖解は十二支宮に五星を配する起例なり、
 其次に十干變曜定局圖解は十干の變曜を知る起例を
 擧ぐ又竹羅三限定局圖解は是生時を以て太陽太陰等
 の星曜を定め且又一種の占例備る故禍福を斷定を得
 べし、
 一童限滿關行大限圖解は生年より十五才に至るを童限
 滿關と稱し小兒間を中央に十二宮を配し看る之を童
 限と云又外圍の十二宮に命宮財帛疾厄福德官祿等を

配し、十六才より百歳以上に至る、人生一世の吉凶を知るを大限と云、此命宮たる斯術に限る一種の法にて、安命宮又は立命と稱し、生時を以て定るに、次の量天總尺圖を併用して之を定む、是即ち斯術の主要なり、

一大限過宮量天總尺圖解は、十二宮を主と爲し、一宮を三十度と爲し、全宮に三百六十度に割り、其中へ廿八宿度を配す、是即ち安命安身宮を定る緊要の圖なり、

一十二命宮分金割度論は、前圖小兒の生年より十一才以上に至る童限を初關中關末關の三關と爲し、其期間の禍福を測る用なり、次に圖の運用法の三關割度起例及び割度詳論説等を掲げ、次に三方四正難星吊度天津例暗金例等は、畢生に係る禍福を知るべし、

一限年分訣限行度訣論逐年行限度法圖を設け、更に定行限度分秒訣の末文に占例を掲げ、運用方法を示し、猶圖は福祿夫妻宮等は何年間を統轄し、一年に何度を行る等の數字の解釋在り、次に洞微大限要秘は、洞微百大限に就て、其要秘を詳細に説明し、禍福の來る所以を知り、次に行度要訣論并に行限度假如、其次に躔度倒限直論等、是皆大限を行る吉凶を數題に區分して、其遇處の善惡の精論なり、

一餘奴傷主論及び煞又倒限論宮度倒限論太陰太陽倒限論は、是皆限度の凶事に係る題を設け、其現實し來る處を知る、然るに制伏制化の理を以て禍福を知るに往々不審に想ふ事項在りと雖も、能く眞理を味ひ熟達に至

れば、玄機の微妙を感得爲すべし。
 一 第一卷の附録に、斯學之梗要と題し、前に録す大意と重
 複の嫌ひ在りと雖も、全部の梗要を摘録して、運用方法
 を叙述し、研究に便ならしむ。次に斷定法、口訣と題し、運
 用の主眼たる天命を觀察する要領を掲載せり。故に此
 兩項を能く了解して、而る後に本文を精讀せば、是即ち
 解決の捷徑なるべし。
 一本卷の吉凶神殺及ひ、諸星辰の名稱は古來天學に傳る
 處の實稱にて、假稱を用す。且又木曜か土星に値て、化曜
 等の類も亦然り。將亦星稱中に讀難き文字在て、字典、字
 彙、玉篇等に看ざる字は、假に音訓を附し置たり。原書は
 魯魚甚多く、讀み難し。故に諸書を參看し、訂正すと雖も、

猶往々一讀に明め難き處在り。本と漢文は簡にして深
 意を含む。殊に詩歌賦に作たる秘訣多き故、普通の文體
 と異なる處多し。此意を諒し、默讀玩味せば、了解爲すを得
 ん。初學者に運用法を知悉せしめんと欲し、及ぶ限り懇
 切に解説爲すも、未だ意を竭ざるを虞る。江湖の識者宜
 く不備の箇處を訂正在らば、幸も甚だしと云爾。

著者謹識

天命
理數
造化之樞機 卷之一

目次

天學梗要	一
天體	二
地體	五
二十八宿見界總星圖并解	一〇
北極至赤道圈中分一半見界總星圖	三
南極至赤道圈中分一半見界總星圖	三
黃赤道南北極之圖 附大意	四
三輪六合八觚之圖 附大意	六

渾象內日月地三形圖	附大意	一八
地平受子午規之圖	附大意	二〇
晦朔弦望之圖	附大意	二三
以上	天學梗要ニ屬ス	
三才妙論		二四
三瑞圖		二七
百刻日月相會總圖		三一
諸曆黃道宿度圖		三三
星辰入垣升殿圖		三五
周天七政四餘行度		三六
太陽太陰行度詳論		四八
約太陽行度詩		五一

約太陰行度詩	五一
十一曜小周天詩	五二
十一曜大周天詩	五四
二十八宿度數	五四
七政四餘變曜貴賤格局分野圖解	五五
七政四餘入廟歌訣	五六
五星忌宮歌訣	五九
二星喬廟歌訣	六一
神煞圖	六二
十二宮吉星凶神註	七六
天盤通加圖解	八三
地盤通關圖解	八四

人盤虛實圖解	八五
九曜喜忌定局圖解	九一
十干變曜定局圖解	九二
竹羅三限定局圖解	九四
童限滿關行大限圖解	九六
大限過宮量天總尺圖解	九九
十二命宮分宮劃度圖解	一〇〇
三關劃度起例	一〇一
三方四正難星吊度	一〇三
天津例	一〇五
暗金例	一〇六
三關劃度論	一〇七

詳論三關之說	一〇九
限年分訣論	一一〇
限行度訣論	一一一
逐年行限度法圖解	一一二
行限度分抄定訣	一一三
洞徵大限要秘	一一五
行限度要訣論	一二〇
行限度假如	一二四
躔度倒限直論	一二九
餘奴傷主論	一四〇
煞及倒限論	一四五
宮度倒限論	一四八

太陰太陽倒限論……………一五三

附 錄

斯術之梗要……………一

天命斷定法口訣……………一四

目 次 (了)

天命造化之樞機 卷之一

星文館主 山岸乾齊編著

天學梗要

天學梗要

吾人は天地の間に居住する者、其所在の理を講究は、
當然の要務なるへし、夫れ天に在て象を成し、地に在
て形を成して變化を見る、日月星辰の運行て四時を循
環し、之に由て萬物發生す、其萬物中の最靈なる人は、
男女夫婦有り、然る後に父子君臣有り、上下貴賤の等
級有り、各天職を務て生活を爲す故に天文を學ふ、其
益爲る、蓋し鮮少からざるへし

天 體

天體

七曜は日月火
水木金土を云
列宿は二十八
宿を云、七政
は七曜を云、

諸天の主宰は
常に靜天に在
り

天の蒼々たる高遠にして極り無し其間に星辰の錯綜して體象は運旋て止す之を聞を得へき歟
夫れ天體は碧瓊の如く透映して渾圓に七曜列宿は層々に運旋して以て地を裏む七政は運旋て高下有る故に之を層々と謂ふ地體は僅に彈丸の如くにして天の最中に適し永靜に不動して四面に人居るなり最上の一層は常に靜天にして諸天の主宰を爲す其次を宗動天と爲す下諸重の天を帶轉するなり此天の運るは南北二極に依て東に從て西に左旋して十二時に一周を歴て其各天は皆此一動の因て之を製せられて運る其次を恒星天と爲す七曜の上在り此天の本動なり赤道の上に於て南に偏て北し北よりして南す之を一近一距動と謂ふ七千年を

恒星七曜の一周の差異

右旋は議論多
し、別書に譲
る、赤道と黃
道、

歴て一周を行る東より西を歴て正行は約二萬五千餘年にして一周を行る其次に土星此土星は約二十九年、一百五十五日零二十五刻にして一周天を行るなり次に木星木星は約十一年、三百十三日七十刻に一周を行る火星天火星は約一年、三百二十一日九十三刻に一周を行る其次は太陽天は世界を照映して萬象の光を取る故に七曜の中に在るなり
太陽は約三百六十五日、二十三刻五分にて一周を行る其次は金水二星の天は皆太陽天に從て行る太陰天は最も地に近し太陰は約二十七日、三十一刻に一周を行る此恒星七曜の諸天は俱に西よりして東する右旋の行に從て算するなり左旋の一天は靜天は極を以て軸と爲し

樞は鍵に同じ
又門を限る
木なり、亦關
鍵と云
正子午

經緯は分て經
星と緯星と爲
す

赤道を以て天腰と爲し、右旋の諸天は黃道の極を以て軸
と爲し、南北に偏くと各二十三度三十一分即ち黃道を以
て天腰と爲し、赤道の心と、靜天の心と、宗動天の心と、地球
の心とは同く是一點なり、其兩極は南北子午に在て、一日
一周を主る、七曜列宿の公運は悉く轉樞を繫く、其道と天
元赤道と相合して一線と爲し、動靜異ると雖も、終古に其
極を離れざるを、正子午と爲すなり、黃道は斜絡て赤道に
出入するを各二十三度半にて、其極は正子午に非らず、則
ち己亥に在るなり、太陽は黃道正線を行て、其天心と諸天
と心を同くせざる故に、其行轉は地面に於て自ら平行に
非らざるなり、黃道の左右各八度を太陰五星出入の道と
爲す、日月の經緯は俱に黃道の極に従て轉る故、子午の樞

地體

天地の體を論
す

に同じからざる有るなり、吾儒は九重を按ずる者は、恒星
七曜の行度各異なるに因て、相次て上る、數重の權立て以て
測り起すと云、以上天體なり、

地體

今日曰く天體は渾圓と、古人亦曰く天は卵白の如く、地
は卵黄の如し、是天の外を包て地は中に互るなり、然
して天は乃ち輕清の氣なり、地は乃ち重濁の滓にて
既に圓體を爲す中に互る、四面は皆人なり、能く空に
浮て墜さらんや、何を以て其居を安んじて、能く其四
面を辨ぜんや、

天地は渾圓として本と相聯屬せり、古人の云く、一尺の地

地も亦天なり

を減ず則ち一尺の天を多しとす然らば地は亦天なり其
形を以て之を言て之を地と謂ふ唯天虚は晝夜にて外を
運旋て地實は確然として中に動かざるなり地の四面の
窪たる者は河海と爲す突なる者は山嶽と爲し平なる者
は田地と爲し人の居立する所は皆圓體に依る天を裏て
地に著く運旋の氣は升降して息まず四面は緊塞して展
側を容ず地は中に凝て自ら守らざる事を得ざるなり然
して總て方隅無し四面都て是上に墜べき處なし天の至
中に適す亦倚るべき處無し天の東に升り西に降る亦人
の居る所に就て言ふ天は則ち處として升に非らざる無
し處として降に非らざる無し渾淪環轉する而已地圓は
則ち處として中に非らざる無し掲子曰く天の虚は虚に

〇地體

六

機槍、慧字は
凶星
珥はみいたま
霧は白瑞雲
なり、

圈はをり、ま
けものゝ如き
を云

非らざるなり虚は氣之に塞り満て空隙有る無し如し瓶
を以て水を挈るに其一孔を閉づ水便ち入らず氣中に塞
ればなり氣は即ち天なり地の實は實に非らざるなり氣
は之に出入す土石有と雖も其堅者は悉く皮表有り進は
則ち虚濡なり然して天内に氣有り故に時結して機槍慧
字の諸星と爲す映じて暈珥又は霽珥の諸象と爲る地内
に空有り故に潮汐呼吸を轉じて泉源と爲す深山大谷は
吐て雲霧を爲陰伏し陽愆り發して震撼を爲故に游子曰
く地亦天なりと唯極星を指して東西南北を分ち太陽を
測る寒暑晝夜を定め故に居る所の地に日の照す所は同
じからず赤道の下南北二十三度半の地に一圈し居れば
春秋二分に太陽正に其天頂を過て日中に影無し春分を

〇地體

七

五帶を論ず、
正帯二、温帯、
熱帯、寒帯の
五帯を云、

過て則ち影南に在り秋分を過て則ち影北に在り名けて
煖帯と爲す南北二十三度半の以外に截て六十六度半の
地に至る此の地は太陽其の天頂を経ず近からずして遠
からず此南北の二圈を正帯と爲し甚だ冷熱ならず此帯
は温和にて聖賢挺生す是赤道の北十八度より四十二度
に至る適に其地に當る南北の二方は六十六度半より各
其極に抵るを冷帯と爲す日に太陽其地に繞て恆に見る
事有り日に太陽其地に繞て恆に隠る事有り隱見の候は
或は數月に至り或は半年に至る掲子曰く兩極の下に天
輪横繞を半年は晝と爲し半年は夜と爲す其地は甚だ冷
にて其人は寒に耐るなり此五帯の大概なり此に因て之
を推す即ち丑宮北に向方は冬至と爲れば南に向方は則

地球の周圍九
萬里

地體の概論斯
の如し、此他
に諸説有りと
雖も茲に略す

ち夏至と爲す諸節皆然らざるなし又因て之を推すに地
球は人の止る所と爲す天頂を以て四方を分つ亦界して
三百六十度と爲し以て天行と合とすべし東西を經と爲
し測るに黃道を以てす南北を緯と爲し定るに子午を以
てす南北を測るが如く二極有て之が端と爲す游熊曰く
西學の地球を測る周圍九萬里有り北行二百五十里に往
く如きは極星を測る便ち高き事一度二萬二千五百里に
て便ち高き事九十度にて天頂正中に在り再び行く則ち
又中に從て漸く低く北極を南に過ぎ南極北に過るの理
無は地圓なる故なり東西を測るごときは必ず先づ一處
を定て界を起すの端と爲す某地に處る如きは即ち某地
を以て端と爲す方を測るべきなり如し測法無く則ち寒

暑定る無し、東西辨ぜざる耳。〇猶次項の諸圖を看て天文の概要を知了すべし。

二十八宿見界總星改正圖解

凡そ二十八宿布列圖の次第は、各其宿舎の界限に見る、者を圖す、故に見解總星と題したり、他圖に二十八宿を載と雖も、全く載る者無く、或は赤道以北の圖には、赤道以南の宿を列せず、赤道以南の圖には、赤道を省きたり、或は其名位のみ録して星象を畫す、或は黃赤二線に當る者を掲て、線外に之を逸す、故に唯二十八宿のみを記して、他星を交す、初學の所見に便ならしむ。

二十八宿見界
總星改正圖解

内圓は北極の周圍と上規の圈なり、外の圓圖は黃道南外と、南極の周圍と下規の圈なり、是亦蓋天の象に因れり、之を天象に視れば、其形勢微か、齟齬すと雖も、球象を平圓に寫す故に、此の如くならざれば、不可なり、固より強て象る圖なれば、眞の形勢に非らず、圖中黑點に星象を設る者に、微細にして見難き星なり、又其宿に附屬する小星、角宿の平道、危宿の墳墓の如き、二三之を載たり、舊圖は星象正しからず、悉く方圖に較へ、天象に考て之を改む、然るに古今諸家の考る所と、圖書の所傳の星象之を天象に較れば、多く忒ふ、此故に予之を憂る事茲に年有り、蓋し星象布列の廣狹、正斜は、東西に升降の時と、南中の時とは、其象異同有り、故に一定成り難し、之に依て悉く南中の正象を精測し

て改圖を爲したり茲に其眞を失ふ甚しき者を正し測的
を知らしめ初學の考鑿に便する而已

北極至赤道圈中分一半見界總星改正圖解

南極至赤道圈中分一半見界總星改正圖解

北極より赤道に至ると南極より赤道に至る兩圖を合て
青天の全圖は即ち天球の象なり北極南極を中心として
各赤道の一線より截て二片と爲し平圓に伸て騰寫せり
前圖は北極より赤道の規圈に至る迄全天を中より分ち
其一方半天の界限に見る、總星圖なり後圖は南極より
赤道の規圈に至る迄全天を中より分て其一方半天の界
限に見る、總星の圖なり兩圖を合せば即ち全天球の總
星の圖と成るべし

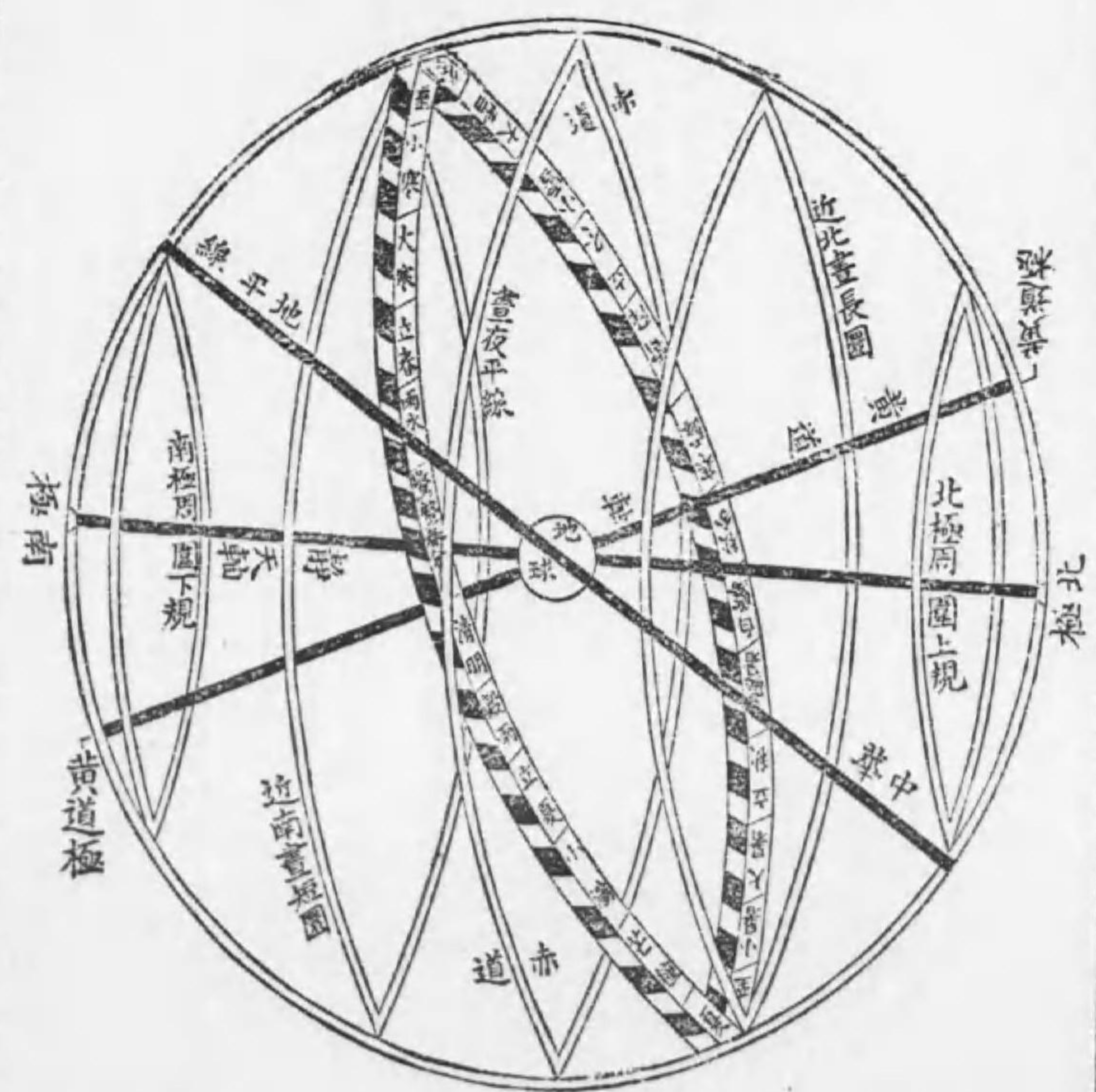
北極南極より赤道に至る
圈中分一半見
界總星改正圖
解

周圍の圈は赤道の周規故に各二十八宿を回らし記す之
を以て兩圖を合せば即ち全天と成る各内の圓規は各極
の周圍即ち通徑七十餘度の圖にて上規と下規の象なり
廣狹の界系は二十八宿の分に内に三垣有り雜座の衆星
各二十八宿に分屬す即ち三百餘座一千一百六十有六の
象なり舊圖は繆寫多し小圖は悉く分辨成難し故に大に
眞を失ふ者は之を改正して後學の合攷に備る爾

此の圖内圈は南極の左右に徑り七十餘度の圖にして下
規の象なり南極の諸星垣見界星圖及ひ此餘圖は天文綱
要に載す此諸星は我邦より見えざる故是非得失を訂す
能はず是を以て改正圖も亦舊に仍て圖す者と知るべし
〔入江氏の改正圖を附記す〕

極圖
黃赤道南北
(1)

(1) 圖正改北南道赤黃



〔同圖說明〕
 此渾象圖の子午に對するは南北極と爲し南北を分つ者は之を赤道圖と爲す赤道を斜絡る者を黃道圖と爲し北に近き者を又畫

李振は明人に
 て、天學に通
 す、蓋天は天象
 を寫したる、
 天學の器具に
 て渾儀の類を
 云、

長圖と爲す南に近き者を又畫短圖と爲し周圖に列宿
 を布くなり諸圖に並星共に渾象の内に麗く今折して
 數圖と爲す者は渾圖と爲す而るに全載爲す能はざる
 故なり李振曰く天體は必ず圖を具て始て之を明らむ
 べき事を要す渾儀は塑像の如く平儀は則ち繪像の如
 く類叩し轉側を兼て之に背る者なり塑は則ち渾圖繪
 は則ち平圖の全圖にて渾天割圖は則ち蓋天なり夫れ
 渾天は圖すべからず今強て之を圖すを以て梗概を識
 るべし、

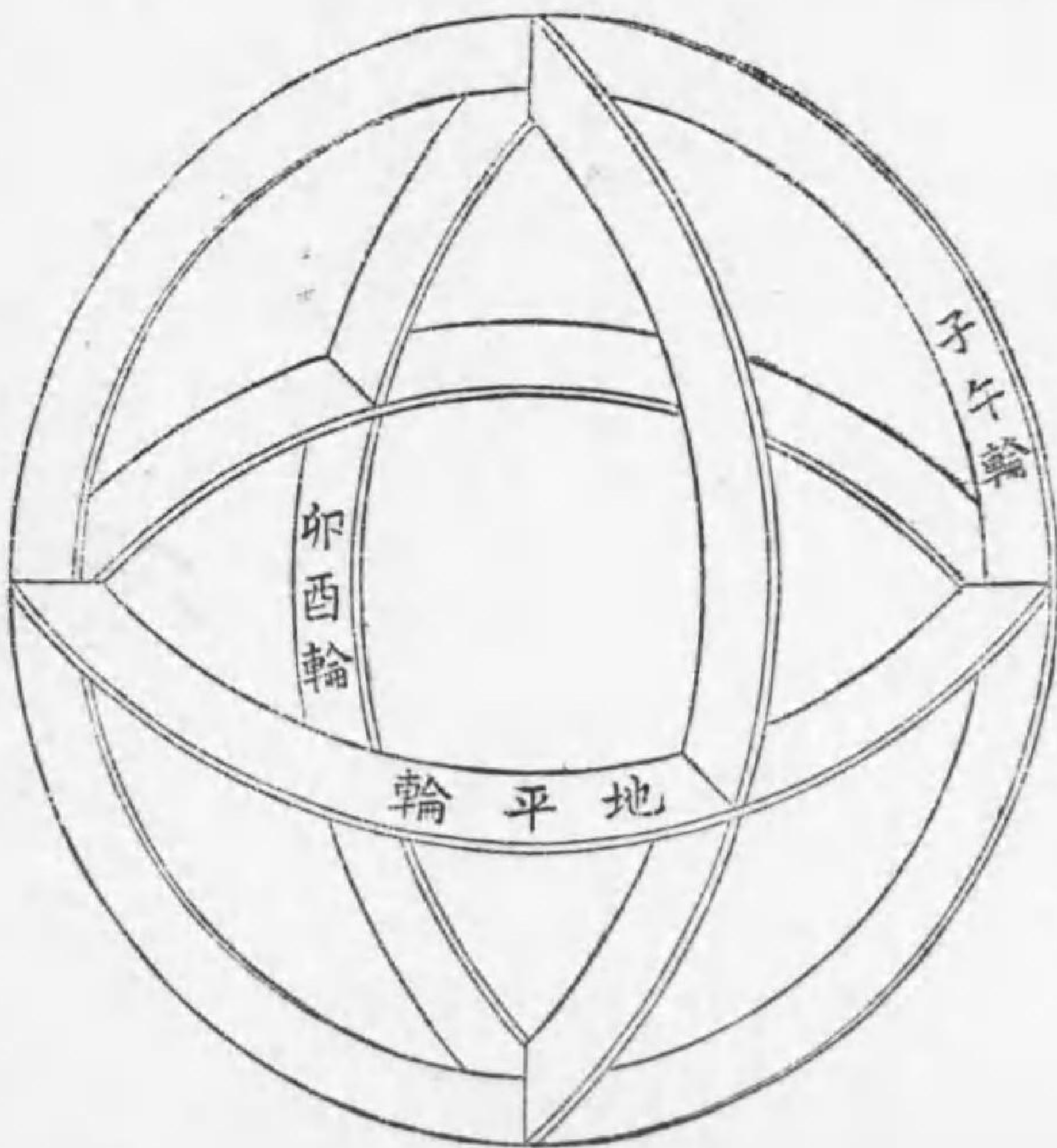
三輪六合八觚之圖

(2)

〔同圖說明〕

三輪六合八觚之圖(2)
水して之を泉
すとは、水平
の術、水準器
を云

先後天とは、
先天は伏羲の
易、後天とは
文王の易を云



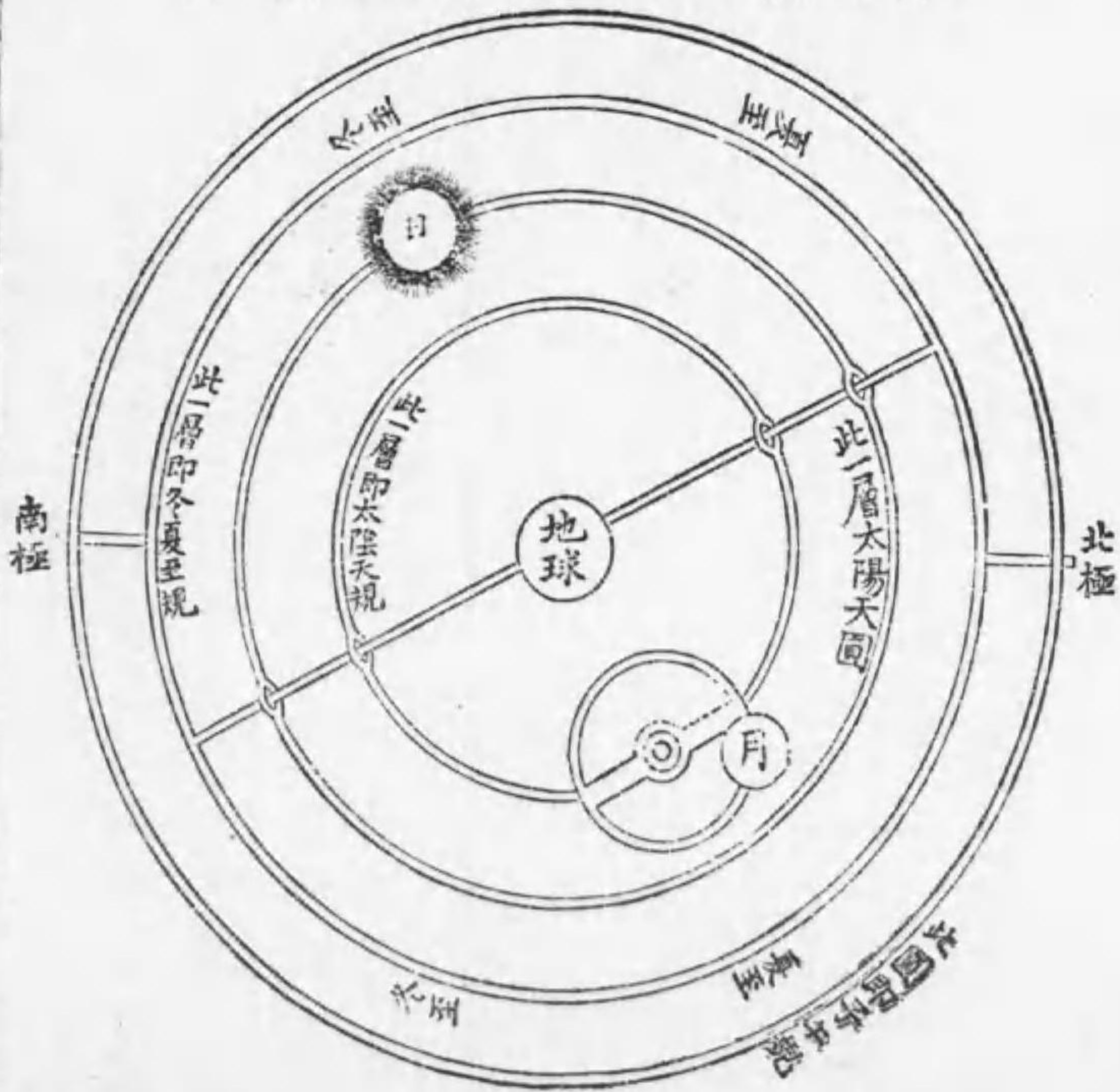
凡そ三輪を設け水
して之を泉すれば
則ち地平を知る
の之を丙す故に子
午を知るべし繩し
て之を垂る則ち上
下を知る輪は皆先
后天八卦十二宮周
期の度是を三輪と
爲す是を六合と爲
す是を八觚と爲し

璇璣とは大舜
の時に璇璣玉
衡を製し、其
國土の高下測
り、且南北二
極の在位を定
め玉ふ、故に
圖の約法と爲
す

此大舜璇璣の始め圖して約法なり、是に於て地平に出
入して、南北の二極を定むべし、腰に黃赤二道を施す形
ち雙環の如し、日月交分し、經緯は皆距度四に破て一を
取るべし、是象限と爲し、一星を求んと欲す、立地に得べ
し、今以て無中の理に徴する事有り、此を借て彌倫す、以
るに世に言ふ圓は、皆畫毬にして鏡の如く、扁圓にて圓
圓に非らざるなり、

渾象內日月地
三形圖
(3)

(3) 圖正改形三地月日內象渾



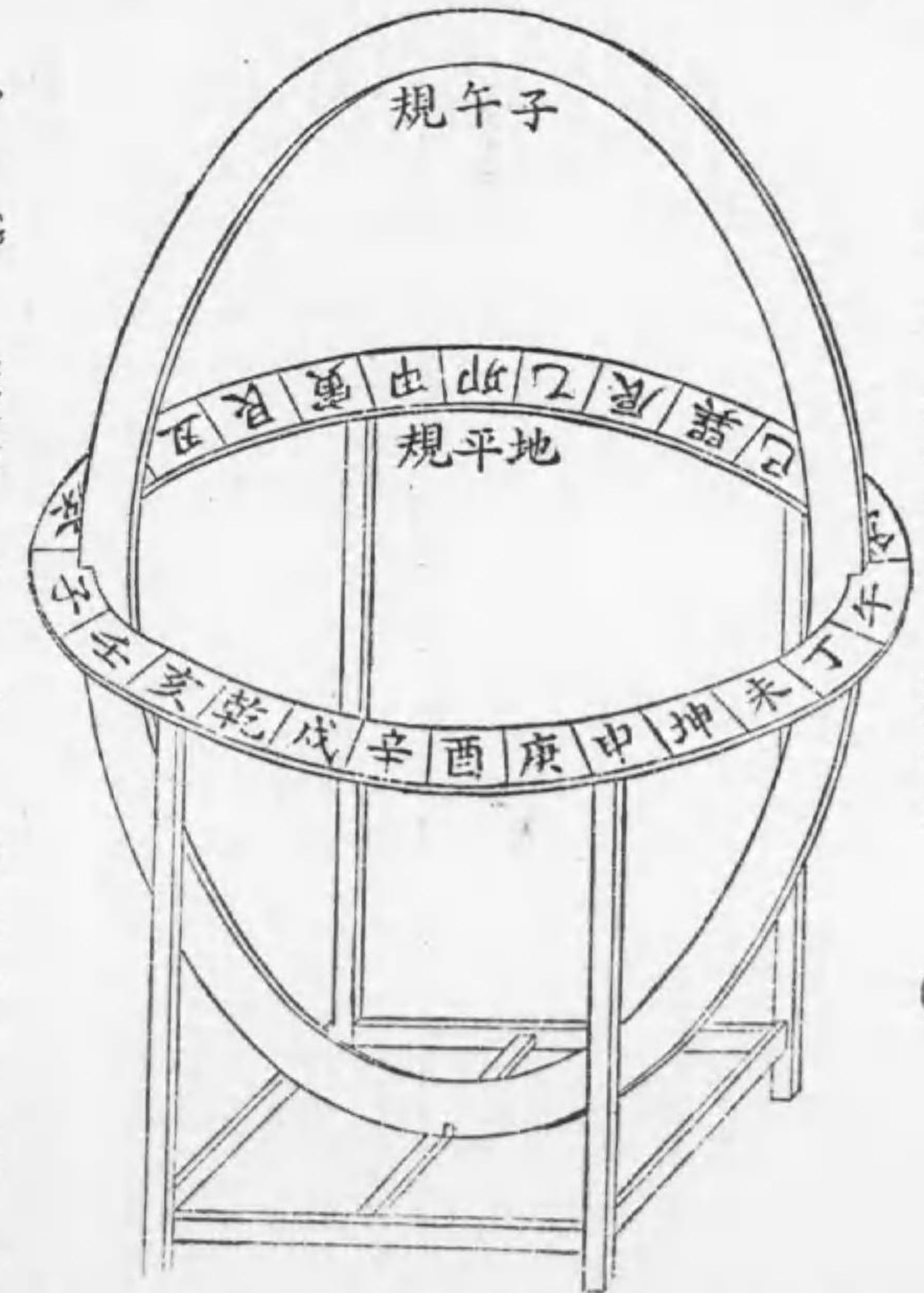
〔同圖說明〕
 此第二圖は日行
 る冬至の規に
 て、冬至の處に
 對して、一軸を貫
 くを黃道軸と爲
 す、最中の小圓は
 地球の形と爲す、
 外の一圓軸を貫
 て旋轉するを月
 輪規と爲す、上に
 月の遊輪を施し、

徑り十二度輪心上に規上に縮きて亦旋轉すべし、以て
 太陰の系は之を轉ずるは、則ち九道と爲す、此九道は月
 自ら遊輪有り、月輪又黃道に隨て轉ずる事を要するが
 故なり、此外の一圓稍大に亦軸内を貫く日輪規と爲す、
 以て太陽形に系る、此二圓を用て日月交蝕の理を辨ず
 べし、此皆渾天の象なり、〔日月交蝕は天文の書に載し
 茲に略す〕

地平受子午規圖 (4)

天地に十二支を配するは、天に十二宮を配し、天學測量の基を定め、地に亦支を配し方位を知る

地平受子午規圖



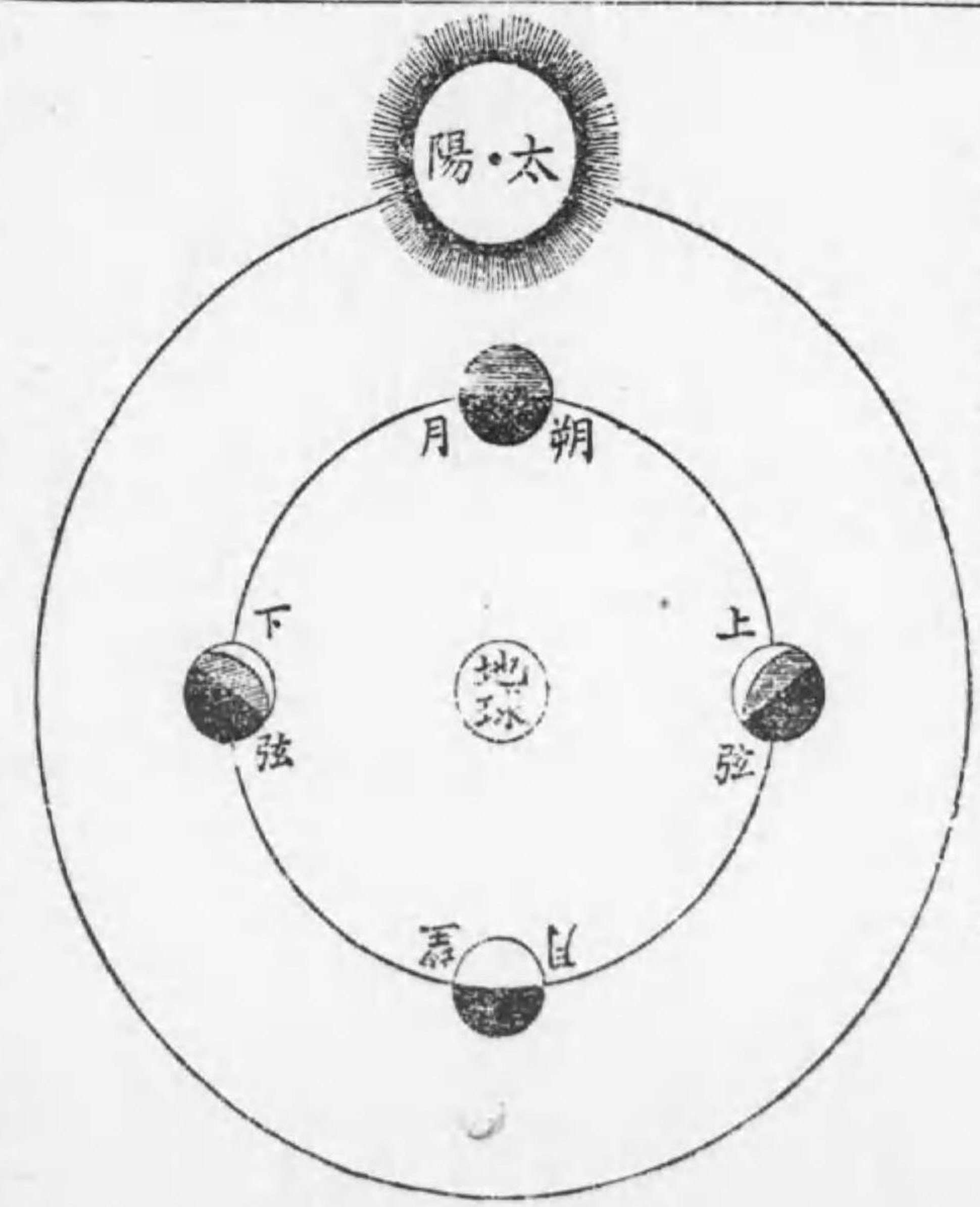
地を出る南極の地に入る各所在に隨て測定すべし、渾

〔同圖說明〕

凡そ地は天中に居れり、乃ち平規を象外に設る者は以て地上地下界を分つなり、側立する者は、乃ち子午規なり、北極の

象を此規の中に納て、二極を以て圓樞と爲して運轉する事一日に一周して以て天體の行度に合す、是即ち天文の原則なり、〇世の童蒙は天地に支を配する所以を知らず、是天に十二宮在て、子午規有り、之に由て亦地上に支を受け配置し、之に由て其根基を定む、今亦人の禍福を測り知るに用ひる處なり、

晦朔弦望圖(5)



晦朔弦望圖の説明 (5)

〔同圖説明〕
 朔日は日月度を同くし、月天は正に日天の下に居る日光獨り其向上の半面を照す人は中間に在り仰ぎ視る獨り能く其無光の故に朔の日月

は全く無光を視る朔過て日月漸く離れ初三四日に至る月光峨嵒の如し初七八日に至る則ち月は其上面一分の光を見るを上弦と爲し十五六日に至る則ち日月對照して全く光を望と爲す望の後に日漸く遠く廿三四日に至る則ち月其下面一分の光を見るを下弦と爲す晦朔弦望は是れ月は太陽を離れ遠近有るを以て故に其光時に消長せざる無きなり○記載する圖の中に於て此圖は人生の禍福を知るに最緊と爲し此日月の朔望及び上弦下弦等の位置を能く知らざれば本文を理解する事難し實に術の應用運心に就て缺くべからざる圖なり輕々しく看過する勿れ

以上天文の所説は天經或問を載て梗要を録と雖も而

三才妙論、星宿の星とは七曜九曜等を云、宿曜は二十八宿曜を云、來龍は山の形象等を云、又人に在ては現世の情態を來龍と云

るに天文學は専門の一科學にして、簡單に盡すべき者にあらず、故に更に天文綱要と題する書に譲る最も七政四餘等の必要の事項は、本文に備るも、天象の何たるを知らざる者、本書を理解する難きを以て、唯其一端を知らしむる而已、

三才妙論

三才とは天地人を云、凡そ天文を善く識者は、星宿の動靜を觀て、則ち風雲雷雨の降るを知る、地理を善く識者は、山水の用を察して、來龍の根源を知る、人命を善く推者は、七政四餘を列して、則ち制を知り、其人の貧乏の疎的を知るや、其理は一なり、

乾道は陽體なり、坤道は陰體なり、

沽契は大約を云

予聞く大道は既に判て形有り、形に因て數有り、天は乾道を得て一を以て體と爲し、輕清して上に在り、用ひる所の者は陽なり、地は坤道を得て二を以て體と爲す、重濁して下に在り、用ひる所の者は陰なり、人は其中間に生る故に、天地陰陽の氣を稟く之を則ち三才と曰ふ、天地の始終は一十二萬九千六百年を一元と爲し、一萬八百年を以て一會の數と爲す、三百六十日を以て一歲と爲し、三萬六千歳を一劫と爲し、其一劫を一沽契と爲し、天は子に開て地は丑に闢け、人は寅に生て物を閉づ、戌より亥に到る、則ち一周は十二會にて復混るなり、人は萬物の靈長爲し、天地の正氣を得て、原賦一百二十九年六十日を、一會の數と爲す、天地の運用は常道を失はず、數は能く長久しつゝ、在り人

人は欲の爲めに運命を自ら破壊する者多し、長壽在り、夭折在り、素より天命に定る處の壽の長短者も在りと雖も、素行に由て破る者多し、數の根源、

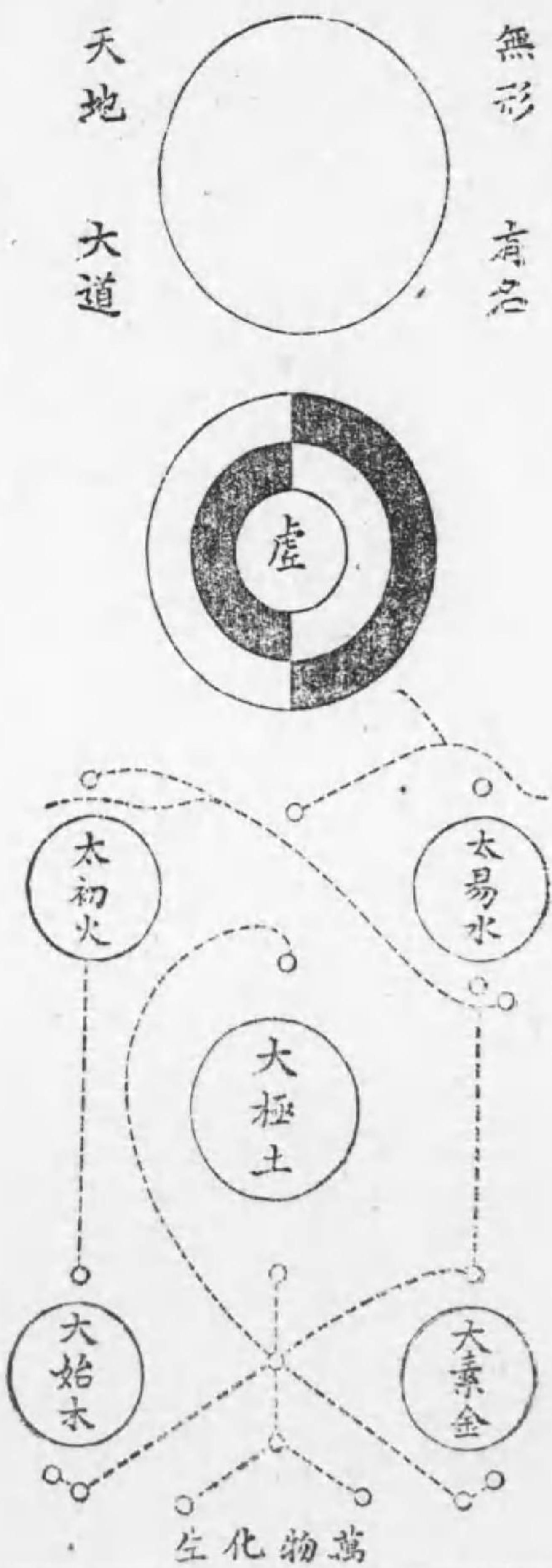
生は十五歳以後は物欲交々蔽て安命を知らず、乃ち常道を失て、酒色等の事を貪婪て、財氣を損壞す、之に由て元神を以て周る能はざるを致せり、其賦する所の數は夭折多し、若し能く其常を守者は、則ち一會の數を周るべし、清淨を加以て精神を養ひ、則ち浩浩無窮にて天地と齊しく、其長久の信を之努は、我命は我に在て、浩劫に在らざるなり、彼混沌の時に太易水を生じ、太易氣曰ふ、太初に火を生じ、有氣之未だ初さ曰ふ、太始に木を生じ、形有て未だ質あ、太素に金を生ず、質在て未だ體あ、太極に土を生じ、形質已に具る、乃此故に水の數は一とし、火の數は二とし、木の數は三とし、金の數は四とし、土の數は五と爲す、是即ち數の根源なり、

太虚元化生圖

無形 有名

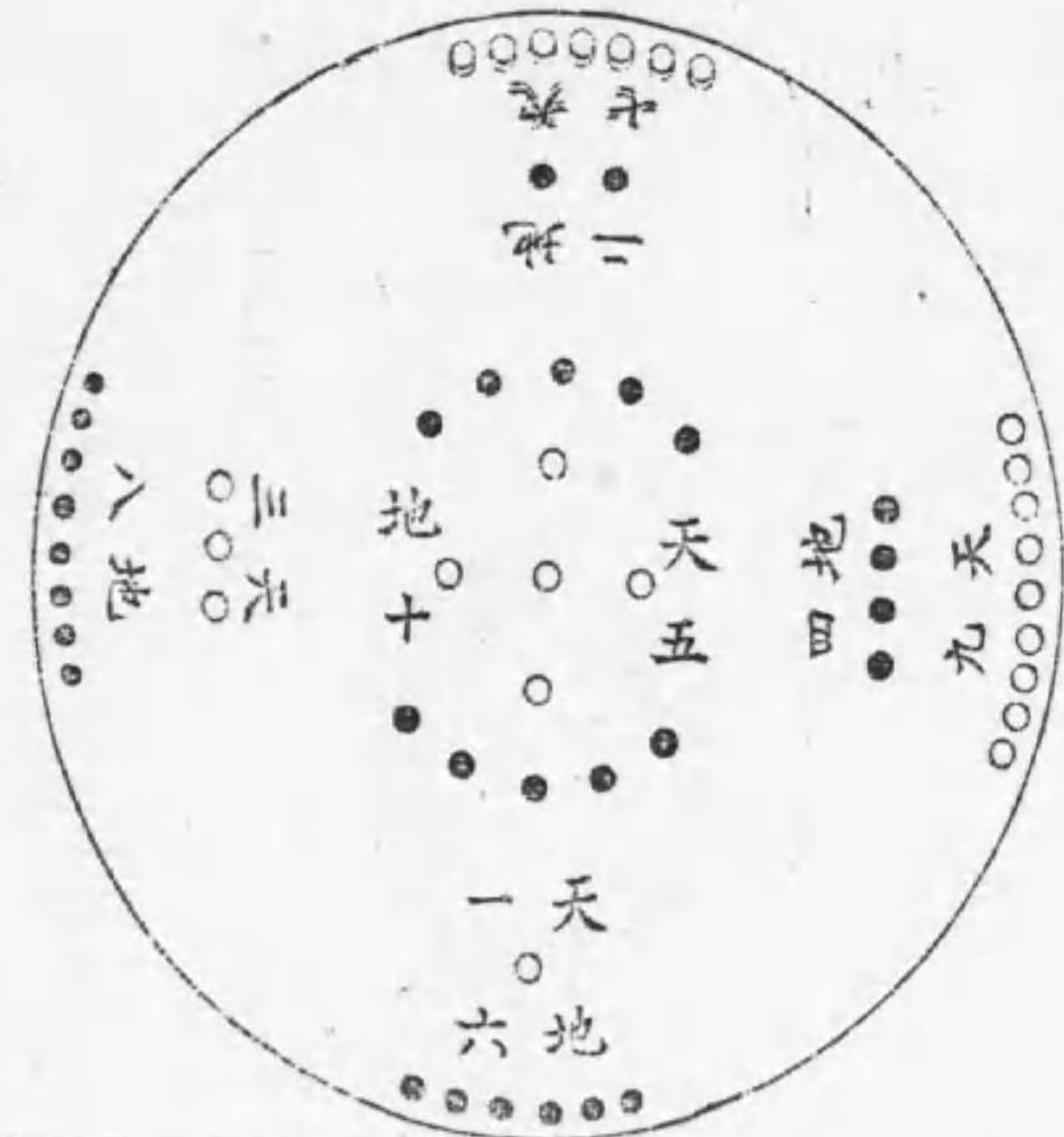
天地 大道

太虚元化生

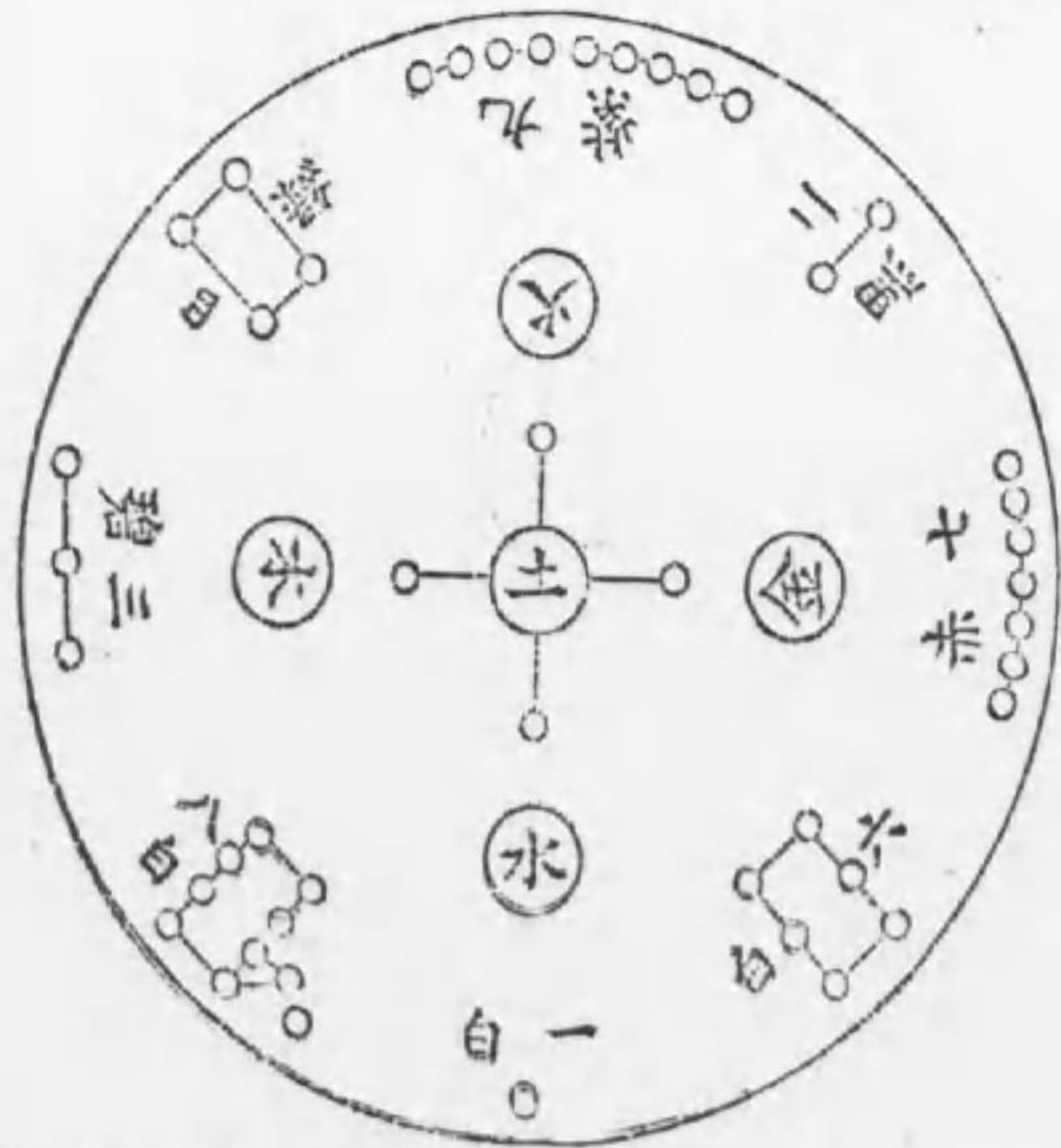


伏羲氏は、
圖を觀て、
數を創制す、
河

龍馬載河圖



神龜負洛圖



太衍に著にて
占筮の具なり

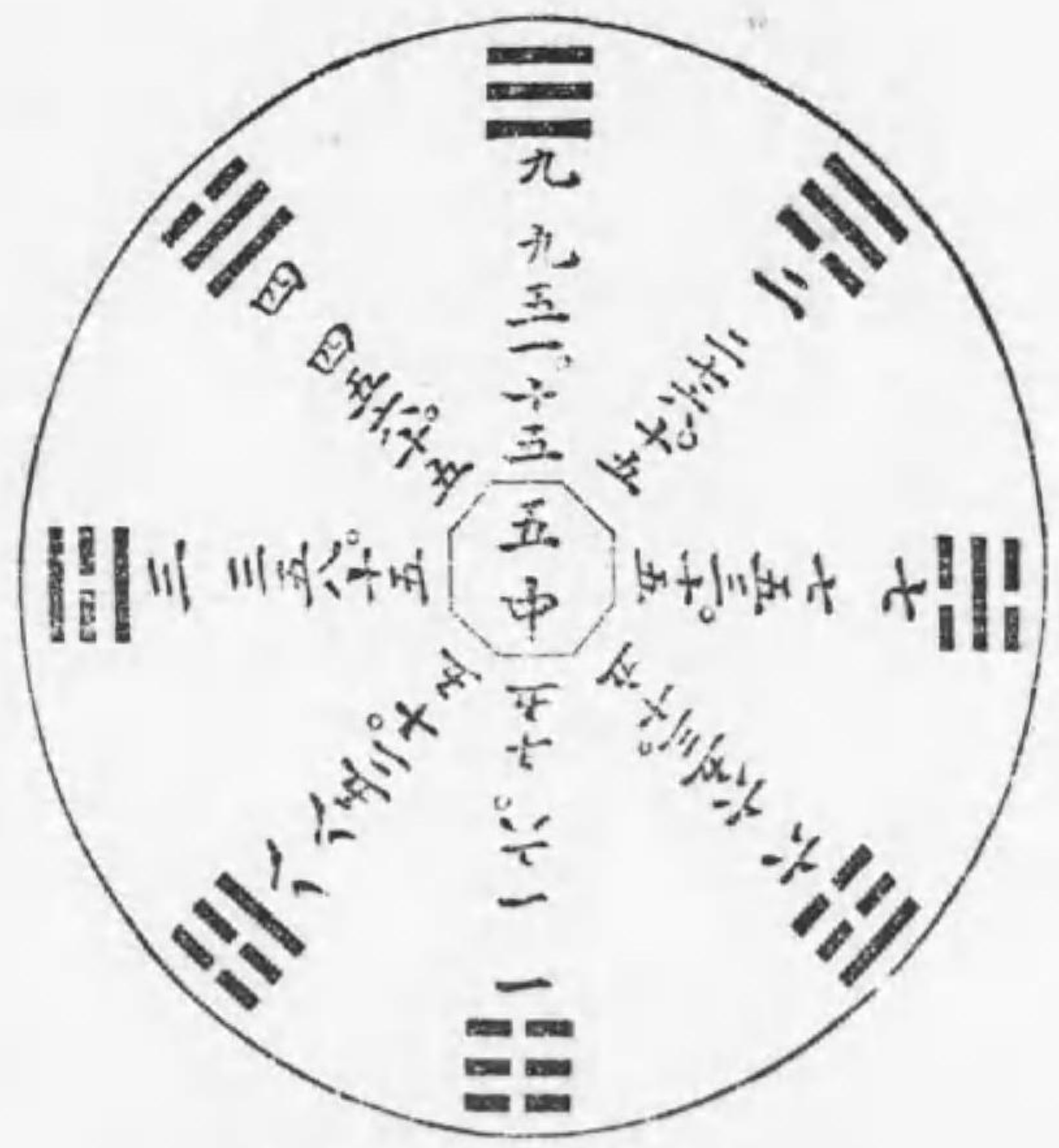
洛書は數の活
動を示す、
又九星の稱在
るは、星象に
類似を以ての
稱なり、

伏羲氏の時に龍馬圖を載て孟河より出づ其書は九篇有
り天數は一三五七九地數は二四六八十天數の五地數の
五五位相得て各合有り天數は二十有五地數は三十天地
の數五十有五なり是則ち大衍の數は河洛の數より取る
詳解は已に推命寶鑑に載たるを以て再び贅せず、
神禹氏の時に靈龜書を負て洛水より出づ其中に六篇有
り洛書は蓋し龜象に取る故に其數九を戴て一を展る左
は三右は七二四は肩と爲し六八は足と爲し五は中央に
居る中は上火の子金の母坤に寄る此亦詳解既に拙著に
出す故に茲に畧す、

彩鳳啣天書圖

八卦と數の活
動圖

彩鳳啣天書



黃帝氏の時に彩鳳書を啣て軒轅の丘上を下る其玉匣を啣ふ一端長さ九寸按ずるに九宮は濶さ八寸八卦は黃帝啓視中に天篆の文册有り龍甲神章十八籍なり此圖の數字は解し難き處有れども原圖の儘に録して濫に改變せず

三才妙論

三〇

常氣晨昏晝夜百刻日月相會圖

太陽の出沒の時期圖

常氣晨昏晝夜百刻
日月相會總圖解

歳は四時に循環して常氣有り晨昏晝夜は時に從て日に長短有り晝夜を百刻と定む其中を日月運旋て止る事無し之に由て晨昏晝夜の長短と日月の相會に定刻在るを知る此圖は研究者が屢對照の便を計て即ち別に製し附したり且亦此法は生時に由て一世の禍福を異にする故晝夜の差別を殊に明にする要有れば長短と太陽の出沒時刻を簡易に知る日出沒の歌に曰く、
正月九月は乙方に出て庚方に入る二月八月は卯方に出

○常氣晨昏晝夜百刻日月相會總圖解

三一

寅時の定刻

て酉方に入る、三月七月は甲方に發して辛地に入る、四月六月は寅方に生じ戌方に入る、五月は辰方に生じ乾方に歸る、仲冬は巽方に出て坤方に入る、惟十月と十二月と在り、辰方に出て申方に入る仔細に詳なり、又寅時を定る歌に曰く、寅時ハ正月九月は五更二點に徹し、二月八月は五更四點に歇る、三月七月は平光にて是寅時、四月六月は日出は寅に出て別つ無し、五月は日高く三丈の地に在り、十月十二月は四更二、仲冬は纔に四更の初に到る、是則ち寅時なるを記すべし、但し別圖と對照し看れば明なり、

五更とは一夜を五更とし、一更を五點に分つ、昏六時の正刻を初更點とし、明六時の正刻迄の六時を五更に割

諸曆黃道宿度宮分次舍圖解

る故に、一更の長さ一時二分宛なり、夫を五點に割る、一點の間は二分四厘宛にて、凡そ二刻許を一點の間と爲す、三更二點半の處が夜半の正中に當る、

諸曆黃道宿度宮分次舍圖解

諸曆とは數種の曆を云、是世の進歩に従て漸次精密に達したる者にて、其宿度に差在を示せり、次に黃道とは赤道の側に一道を假設して、天學研精の便と爲す、此黃赤二道の事は、已に卷首の南北極圖に由て概畧を見るへし、是即ち天象測量の根基と爲す、其次に二十八宿度宮の分次舍の位置は、是亦見界總圖に有り、亦次に立枵星紀、柁木等は、是天離の名稱を載たり、

其次に齊吳燕宋等は國名にて其方位を示す而已是等の要件を一括したる圖なり總て天學に係る事項は綱要に詳なり唯茲に曆差の要を擧る而已

四正歲は子卯酉午の四歲なり、

圖中の五層は統天曆斗四度三十五分秒六層は開禧曆斗四度三十九分秒左宮の分は各赤道に依て四正の歲差の變を黃道と爲す又七層は會天曆斗四度三十四分秒八層は扶時曆斗六度八十五分秒なり右各歲差に依て所在を算定して堂を求む月離は各本曆の黃道に依る但し其差異は別圖に示すが如し是曆の沿革を知る爲に録す又我國の陰曆も數回改る處有りしも今茲に省畧す、
歲差と云は是曆象に就て謂ふ事にて天象を測量するに算術上の見解に由て其說を異にする處多く未だ一定の

確説無が如し其理由たるや太古より歲月を經過に從て、星度の位置を變する事を研究する問題にて甲は歲差を百何十年に一度を變ずると謂ひ乙は百何十年に變ずると謂ふ諸說紛紛として數說有り頗る錯雜なるに且つ緻密の論故詳解は専門の書に譲る、

星辰入垣昇殿廟旺喜樂總圖解

天象の星辰の所在は首に北極南極總星圖に詳なり其無數の星辰の中に於て人體を深く擁護するは二十八宿等にて頗る著名なるは日月と金木火水土の五星と紫氣孛星羅喉計都等星有り其恒星か常に運旋て或時は入垣し或は昇殿し或は廟旺し喜樂する

位置を知る圖なり且亦其運旋の位置に由て吾人一世間の禍福を測る要なり圖は研精者が對照し觀る爲に別に製して附し便ならしむ

夫れ星辰の垣局に入るは恰も仕官の朝堂に在るか如し人生の命も亦然り故に是則ち上格の命なり故に星居垣局は則ち官職を顯し要曆を得へし三臺座に入るは翰苑の榮有り命格高しと雖も星局に入らざれば則ち祿位有るも終に中品下品の唯貴命と爲す而已猶圖の用法は後項の七政四餘入廟乘旺好樂宮の歌訣及び圖を對照して知るへし

周天七政四餘行度論

中品下品は官名

周天七政四餘行度論

七政四餘の行度太陽

周天とは字の如く天の周りを云七政とは日月と木火金水土の五星を云四餘とは炁、孛、羅、計、曜を云行度論とは所謂天を行る度數を詳論するを云此七政四餘の運旋を測るは天學上の測量に屬して算數に關する度數の要たる或は何爲る乎と思慮者も有らん是度數の長短等か吾人の運命禍福の大事を知るに有り凡そ人は一生快樂を貪り榮華に耽る者或は牛馬の勞働を爲すも妻兒の饑餓に類する者等の懸隔在り是皆行度の數に由て測る者なり故に行度に係る事項を數回に題を設け詳論する所以なり

太陽 一 太陽逆宮の順度は一日に一度を行る○子宮は却て廿一日有り度は亦三十の數○亥宮は三十二零六

空白の日は、
白麻を打を見
る、

時度は亦三十二零六分、○戌宮は三十一日零八時度は
只三十度零六分、此則ち空白日有り故に雨多し、○酉宮
は凡そ三十一日度は亦三十數、○申宮は二十九日零八
時度は只二十七零八分、此亦空白日有り故に日多くし
て度少し、○未宮は十九日零十時度は只二十八零十分
此空白有り故に日多し、○午宮は三十一日零五時度は
亦三十一零五分、○巳宮は三十二日零十時度は亦三十
二零十分、○辰宮は三十一日零九時度は亦三十一零九
分、○卯宮は廿九日度は亦二十九數、○寅宮は二十七日
度は亦二十七數、○丑宮は二十七日零七時度は亦二十
七零七分なり、○學者は此法を能く知れば、何ぞ星度の
差有るを患んや、假は子宮の如き危宿十三度に亥を過

此論は本、癸
有る者は、今
局金なり、眞
の天人なり、

人君の象父に
配して、澤恩
の義なり、

太陰、

るなり、若し三十一度其數足る、危宿十二度有り、則ち不
等十三度にして、十二度を過るのみ、餘皆各宮を照す、度
數は、之を推に萬に一失無し、

詩に曰く

金鳥隱日太陽精

體象人君恩澤深

掌握衆星皆輔弼

扶桑光漸旺離明

詩意は日は太陽の精にて人君の象なり、父に配す所に
て、澤恩の義有り、獨り一宮を守り、恵む、其權衆星之が輔
弼爲り、若し科甲星同宮の如きは、則ち其光輝を被る、其
行る一年に一周天なり、

太陰 一太陰は行度の遲疾有て同じからず、逆宮の順度
は、子丑卯未申酉の六宮、只二日零一時二十六度有り、則
ち一日過て止る、十二度零三分、寅亥戌辰の四宮を行る、

羅は羅喉、

人臣の象母に配すは、慈柔の義なり、

只二日零二時二十七度有り、一日に過て止る、十二度午已二宮を行る、只二日三時有り一日に止り、十二度を行る、○凡そ遲疾を論ずる如きは、其理甚だ難し、蓋し太陽に因て羅火星に逢て縮度を致し、空白太陰其光に頼り隨ふ處に太陰有り、土奇に逢て前む無し、故に空白は此れ乃ち遲の説なり、遲の解は二卷に載す、遲留伏逆此四字は天學上の用語なり、

詩に曰く 中藏玉兔太陰精 象母純臣配日月
朔會守情多不吉 望中光普萬方星

詩意月は太陰の精にて、人臣の象と母に配す所慈柔の義有り、又己身と爲す、其行る二十九日に日と交會して一周天せり、

木星は歲星、天の理は諸星皆相運、留、伏逆の解は第二卷に詳なり

天折、災病

火星は熒惑星

木星 一木星は六日に一度を行る、或は七日に一度を行る、一年に一宮を過ぐ、疾は則ち四日、或は五日に一度を行る、

詩に曰く 木德東方號歲星 譬如君子性懷仁
逆爲長喪留災狀 伏是欄杆萬事干

詩意木は仁を主り、歲星と名く、順行は則ち吉にして、逆は則ち長喪星と爲し、天折を主る、留は災殃星と爲し、災病を生ずと爲すに非らず、過は官を主る、破晦に非らず、入伏は號て欄杆星と爲す、善惡都て管せず、諸事平々を主る而已、十二年に一周天を行る、

火星 一火星は五日に三度を行る、兩箇月に一宮を過ぐ、遲は則ち二日に一度を行る、

伏は疫癘、
留は回祿の災

土星

詩に曰く

火乃離明熒惑星。伏時天坎疫癘興。
入留別號天虹地。回祿頻頻家宅驚。

詩意火は禮を主り南方に屬す、多く暴燥を生ず、順逆に由て明に福を爲し、伏は則ち天坎星と化し、瘧瘧の疾を生ず、入留は則ち天虹星と化し、火災を主り頻に見る、其行る、二年に一小周天なり、

土星 一土星は八日に一度を行る、或は九日に一度を行る、二十七箇月に一宮を過ぐ、

詩に曰く

土厚中天號鎮星。伏瘧逆乃破家名。
留是好星人假信。地羅喉亦是他身。

詩意土は信を主り中央に居る鎮星と名く、又名は火羅喉、伏は天瘟星と爲し、疾病を主り、逆は破家星と名く、少

伏は天瘟星、
逆は破家星、
留は天奸星、

前天文の數は
本書後に成る
書なる故、天
學測量上は、
前次を信と爲
すべし、要は
實地の禍福に
的中を以て微
と爲すへし、

く成て多く敗る、留は是天奸星人の知識を主る、故に狡猾と爲す、事は温平なり、其行は最も逸たり、二十九年に一周天せり、

首に載す木星の一周天は、十一年三百十三日七十刻と有り、然るに此文の十二年と比較すれば、此差五十一日餘なり、又火星の一周天は、一年三百二十一日九十三刻と有り、然るに二年との此差四十三日餘なり、亦土星の一周天は、二十九年一百五十五日零二十五刻と有り、然るに二十九年に一周天との差一百五十五日零二十五刻に當る、斯の如く、木火土の三星の周天に、此差有と雖も、今濫に訂正を爲さるは、命理學上に、所謂好運に進者は、其躔度を終り、次躔度に入るも

其餘澤の慶福を享て榮昌者有り且又凶運の者が艱難辛苦を凌に己に年久しきに涉り毫も回復に向はざる有り是即ち未だ餘殃の滅滅に到らず甚だしきは一生貧苦を嘗る者有り其は生年月日に由て測り知る故測量上の差異は暫く訂正せざる所以なり、猥に言を爲す勿れ、

金星

金星 一金星は一日に一度を行る、一月に一宮を移る、一

西方太白星

年一小周天し九年に一大周天を行る、
詩に曰く 金星西方太白星 威權用殺似將軍

一名六二天、
變天德星、

詩意金は義を主り乃ち剛毅の性にて殺伐の權を兼ね留伏を喜ぶ則ち其銳氣を挫て人を傷に至らざるなり、
精嚴自得無餘氣 留伏方爲純厚計

水星

水星 一水星は一日に一度半を行る或は五日に七度を

黑氣辰星

行る、一月に一宮を過て毎月行度同じからず、
詩に曰く 北方黑氣號辰星 又有靈龜廷尉名

一名文武、
一名黑星、
一名廷尉、
一名辰星、

順喜輔陽涵皓魄 逆流也作子妻刑
詩意水は智を主り北方に居る辰星と名く四時に皆見る順を喜て逆を忌む留性は定度無し善に遇は則ち善く惡に遇は則ち惡し日に附て行り一年に一小周天を行る、

炁星

炁星 一紫炁星と名く二十八日に一度を行る、二十八箇

炁は古文の氣

月に一宮を過ぐ、

詩に曰く

木餘有氣紫凝清。

多主幽閒道學人。

縱有凶星來混擾。

也能設得事平平。

詩意紫炁は木の餘氣にて性は清高にて慈善の吉祥曜なり王道藝流の人なり若し人の生時を吉照すれば富貴長壽を主る凶に遇て災を成さず凡そ二十六年に一周天なり

孛星 一孛星は九日に一度を行る九箇月に一宮を過ぐ

一年に四十九度を行る

詩に曰く

水流不盡孛餘名

裸體中天攙槍星

若得抱蟾爲太乙

朝天朝斗紫衣臣

詩意月は孛水星の餘にて多く暗昧不明なり危亡の災厄を興し頭風の疾を主る凶に遇は則ち凶を助け吉に

孛星 一名修孛、一名攙槍、一名太乙、抱蟾ハ月なり 危亡災厄

羅星は羅喉

遇は則ち吉を爲すなり大約九年に一周天せり

羅星 一羅星は十八日に一度を行る或は十九日に一度

詩に曰く

火焚烟焰是羅星

飛勢騰空天首名

逆孽必然來禍速

順行作吉有權人

火焚烟焰の象 逆孽

詩意羅喉は火の餘天首と爲す性は急宿にて怨を仇に

交て義興る能はず能く妖孽を作し血光を主る故に相

寒の熱の瘡氣有り忌曜に逢されば貴くして權有り逆

行は隠て見れずと謂ふ

計星 一計都星は行度は羅星と一般にて每度度相位の

行る再び錯亂無し

詩に曰く

土餘便有計都名

厚載凌空天尾星

瘡氣、 一名計都、 一名天尾、

羅喉遷宮は
計都亦遷宮

蝕は日月の蝕

太陽行度詳論

逆伏何堪生惡毒 順時爲善主人誠
詩意計都は土の餘にて天尾星と爲す常に羅喉と相對する故に首尾星と曰ふ毒惡を含蓄し風癆血氣の災病を主る各逆に天を行る日月に逢て則ち蝕を爲す十八年に一周天なり

太陽太陰行度詳論

日月五星常行に躔度に定規有り其年數に各星辰差在るは前に録す如し茲に太陽太陰の行度を更に詳論す

太陽 一太陽は諸星の首曜にて立命の根源なり一日一夜に一度を行り一月に一宮を移り三百六十五度零二

日月の交會

日蝕

偃蹇は、たを
れる、いざり
の如く

十六分半に一大周天せり或は空白度無し術者は用を知らざる者多し前度に還て後度を用ふ倘し禍福の差を用るは準しからず第太陽の一天の上にて運行て萬方を光照す豈に一日に行らざるの理有らんや朔日に遇ふ尙是前度の望月に遇ふ必ず後度に行る蓋し晨昏を以て知るなり朔日に月と交會して二八の極陰宮に受く羅計の星有り朔日に合す辰巳午未時に西南に在り必ず日蝕は東北に在るは必ず蝕せず或は朔日の夜に合須らく蝕を見ざるべし故に人生此に遇者は父多く早亡す自身を平生に偃蹇の如く顯め斯道の學者は此を明めずんば在るべからず

太陰 一太陰は乃ち安身の主宰にて一日一夜に十三度

太陽行度詳論

晨昏は日の出
没長短を以て
之を論ず明
なり

羅計は羅喉、
計都、

を行り、疾は則ち十四十五度、遅は則ち十二度十一度、最も明らめ難き者は此曜なり、術者は晨昏を以て卯酉の刻を定額と爲し、豈に要を知る無しと謂はず、晨ならずして晨に昏ならずして昏方に差錯無し、若し日出寅刻に晨なり、何を待か卯は日申に没し、昏なり、何ぞ酉刻を待か、今此星を査するに、太陽出沒を以て、其行度を數て、其準と爲せり、十五日は日と相對して、九三の極陽瑩光を受く、普照十五六七夜に遇て、望月を戌亥子時に逢ふ、宮は羅計星有り、必ず元に反て、蝕晝に遇て、蝕を見ざるべし、故に人生此に値は母必ず幼に自身を傷ふ、平生は不遇にて事を作すに成る無し、經に云ふ、身星は最も緊にて命は之に次ぐとは、此之を謂ふなり、

約太陽行度詩

約太陽行度詩

太陽行度不虛行。大寒五日子相迎。雨水五日居亥上。
春分初七戌分明。穀雨九晨臨西位。小滿十日便過申。
夏至九晨歸未上。大暑八日午運行。處暑當加九日巳。
秋分十一始來辰。霜降十三鳥出卯。小雪十二始居寅。
冬至八日來丑位。十二宮中不暫停。
太陽は一年に一周天するに、冬至の日を以て始額と爲し、寅の共度の八日に丑に入る、常氣昏昏晝夜百刻日月相會總圖を參看すべし、又此詩意は太陽の行度は、一日も虚しく行らず、大寒の節五日目は子宮に相迎ふ、雨水の節五日日に亥の上に行り居る等なり、猶天文學の精密

は拙著に譲る、本書は命理を主と爲し、概要は已に前項に録し在り、此故に斯の如く簡単に詩に作り記憶に便ならしむ。

約太陰行度詩

約太陰行度詩

欲識太陰行度時、正月初一起於危、一日常行十三度、五日兩宮次第推、二奎三胃四從畢、五井六柳張居七、八月翼宿以爲初、龍角季秋任遊立、十月房宿作元神、十一月箕宿細尋覓、十二牛女切須知、周天の度會に差有、太陰は十八ヶ月に一周天を行る、正月廿七日の如きは、復危宿度に至るなり、此太陰の行度は二十八宿を以て測る者なり、故に其宿度の名稱等熟知を要す、然らざれば

ば詩意解し難し、詩は太陰の行度の時を識んと欲せば、正月初一日に危宿に起り、一日に常行は十三度なり、五日に兩宮を次第に推すと謂が如し、斯の如く簡に太陰の行度を知るに有り、猶別に製し附す處の圖を參看すれば速く了解せん、

十一曜小周天詩

十一曜小周天詩

有人來問周天數、二十九年原是土、木星周行十二年、火星二年始畢所、金水太陽只一年、木星九方遍度、太陰一月一周天、二十八紫氣取、羅計二星皆十八、只將此法眞爲祖、此十一曜の詩は、各星の行度の年數を作たる者故已に

解を用ひずして明なれば茲に贅せず、

十一曜大周天詩

十一曜大周天詩

八十年前論火躔 孛星六十有三年 金星九載上六十
 氣星二十九年然 惟有水流六十六 計羅九十四無偏
 八十四年加木德 日月分明二十年
 此亦各星の大周年の詩も是即ち解を待て知るに在らざる故に畧す、

二十八宿度數

二十八宿度數

二十八宿の度數及び位置は、本書の定斷上に頗る緊要なりと雖も首に二十八宿見界總星改正圖に掲たる故該圖

に度數及び位置等完備するを以て、更に詩を竝て知るに在らず之に由て詩を載せず又度數等再録せず該圖を最も能く熟知せざれば運用上に支障多し故に精研すべし

統論七政四餘變曜貴賤格局分野總圖解

七政四餘變曜 貴賤格局分野 總圖解

七政四餘の注は已に前に掲ぐ變曜とは其七政四餘の運旋る處に由て吉星曜も凶星と變じ又凶星曜も吉曜に化するの類貴賤とは又星曜の循環に由て人格に貴賤の等差を現實する等を云亦分野とは一國の上を十二宮に配して方位を定め其方位に當る國の何地方は二十八宿の何度として宿度を配するを分野と云故に圖に我國名を假定し參考に供せり統

論とは此等の要件を一括し統る總体の論なり、猶亦本圖は對照する爲に別に製して附す、

七政四餘入廟乘旺好樂宮歌訣

七政四餘は前に述たり入廟とは各星曜に廟在る故其廟に循環し來て入るを云、乘旺とは木乘旺、計旺等の如く循環來て旺するを云、旺は甚だ盛旺なるを云、好樂宮とは水好水樂宮等の如く、各星曜が運旋て其處に至るを好樂するを云、其方面を知るに十二支を配し、又二十八宿度を示したる星辰、入垣、昇殿、廟旺喜樂總圖及び統論七政四餘變曜貴賤格局分野總圖の應用は、總て是星曜の相生する方面へ、運旋至る其禍

七政四餘入廟乘旺好樂宮歌訣

福を爲すは強に宜し、弱に宜しからず、

福の歌に曰く、

十二宮中の愛する所の星は、此星限に入るを最も榮と爲し、細に尋れば愛方に交るを、幸福を享ると爲し、強弱宮中に輕重を別ち、宮位廟旺并に善樂に遇は、士人は手を垂て功名を取る、忽然落陷を兼ね留伏は、鏡上の塵の如くにて、封祿は半減と成る明なり、○先づ入廟は何宮に在るを看る、土丑宮に羅喉寅宮に、火卯宮の中に金は辰宮に在り、計都は己に在り、水羅曜は午宮卯宮は好て招逢ふ、孛星は惟未宮中に向ひ取る、紫炁は申宮に在り、限は一に同じ、日月は午未宮を入廟と云、計都は木亥宮は喜て亨通す、○更に諸星有り、乘旺の方、水午、火丑、孛星は寅宮に當る、土羅計火は卯宮中に旺す、辰位は土旺秀て甫て榮昌す、水日宮に到

土羅は土星羅喉、火計は火星計都、

卯酉の星は、最も吊旺喜樂宮に宜し、落陷留伏は、細減半を補ふ

飛騰は昇進、相會は貴を言、を待す、富て且つ福なり、

る、金は午宮に到る、木は未土宮に居る、紫炁は申宮方に木星は蓋し酉に在り、太陽戌宮に在り、金木の星は亥上に藏る、○又諸星の好樂宮を看る、只是主星怒て從て取る、土は子丑宮たり、水は寅亥宮に在り、火は卯戌宮に居る、最も享通す、金辰酉宮に居る、是皆樂宮と爲す、水は己申宮に到る、總て一に同じ、惟太陽有り、獨り午宮に居る、太陰は未土を好て相逢ふ、○十二宮中喜星有り、日寅宮に、月は卯宮に、水星の辰宮は清し、金星は己宮上に居る、土星の午宮に居る、木星の未宮に、火星の申宮に便ち榮發せり、凡そ庶くは之を得る者、は家富む、士人は此に遇は必ず其位を飛騰すべし、○木土星の朝北子方に在り、土、炎曜の相會は丑未に藏る、金星月を助去り、酉を兼ね、金水辰に逢は大吉昌なり、金水

己に會て己地に居る、水陽相會用は南方なり、日金水木曜は皆亥宮に居る、水火曜は相逢て申郷に到る、土日曜合照は戌宮に居る、命中に相値は兒郎貴し、五星六曜金に歸り分る、時人須らく細に推詳し用ふべし、猶七政四餘の變曜格局圖と、星辰入垣廟旺總圖を併て、參看し能く味ふべし、

五星忌宮歌訣

忌宮とは五星の皆忌む處の宮有り、前項は相生宮に入る故に、人に幸福を與ふ、然るに之に反して刑尅する方面へ運旋入るは、人に災禍を降す故に、此宮に入るに遇者は、人世の貧苦艱難を嘗るが、賤民と輕侮せらる等は免れ難し、其忌宮は前記の二圖を對照すれ

五星忌宮歌訣
此星は平強に
て卯の貪は則
ち天なり

ば明なり、是所謂吉曜變じて凶曜と成る類亦歌訣中
に寶瓶、雙女等は、皆天禽の名稱にて、總て刑尅に由て
災厄等起るべし、

火燒牛角宿は水漂白羊、土埋は雙女宮の命は尋常なり、木
寶瓶を打つ流年に粉碎せり、金騎人馬は實に恟惶る、三限
の星俱に此に値は終身貧苦して他郷に走る、忽然落陷は
災淺しと爲す、強宮を占んと欲して禍殃を見る、或は第五
子孫宮第七妻妾宮に在り、妻を刑し子を害す、細に推詳す
べし、
假令ば命金牛宮に在り、歲星は當に寶瓶宮中に占ふべし、
第一吉星は惟木德反て難に遭ふ、打性は強凶たり、又命天
秤宮の安に在るが如し、便ち巨蟹宮に甚星辰を看る、第一

凶星は月孛曜を推す、當に生守の占は反て官と爲し、吉星
は禍を爲し、凶星は福有り、但宮に從て分て根源を測る、五
星の解神は歌訣の一なり、水漂白羊は太陽を喜ぶ、火燒牛
角宿は月光を増す、木は寶瓶を打羅喉救解なり、金騎人馬
は土を祥と爲し、土埋雙女宮の悉曜に逢が如し、反て禍を
祥と爲して必ず防がず、

一二星喬廟歌訣

二星とは火土の二星を云、是即ち火水は相尅し、土水
は通ずと雖も、乃ち吉と作すなり、喬廟とは喬は字書
に喬木と云ひ、又曲ると云、木の高くして曲るを云、亦
喬は逸恣と在り、故に此廟は他の星曜と異なる處在る

二星喬廟訣

晝生
夜生

を云、是亦前の七政四餘なり、二星廟の歌訣は左の如し、

火土の二星は喬廟と號く、世人音を知る少し物相反して相成る有り、此理最も精と爲す、世人只正廟を愛好し、更に詳考して推す、誰か知る喬廟は、更に奇と爲す、細説を君と知ると在り、此意は晝生の火は參軫宿及び箕壁宿は咎無し、乃ち大吉なり、夜生は角斗宿及び井奎宿は降福有る亦之の如し、水火廟に逢は俱に富利有り、剛柔相濟を得るなり、土徳木度の中に居るが如し、晦滯は乃ち疎通する貴命なり、若し還て此限に逢は、臺省并に給諫の人と爲す、常人は此に遇も亦奇と爲し、富有更に康寧なるべし、

以上叙述する七政四餘の事項を能く運用する事、此術

の要件なり、

六十年間吉凶神殺表

六十年 吉凶
神煞表

此表は生年の干支に由て、各人逐年歳々の吉凶神殺の各宮定局を、一目に知る者なり、其吉凶神殺の禍福を主る處の解釋、次項の註解に詳述在り、而れども先づ此表を能く熟讀を要すなり、〇因に云、吉凶神殺の起例は、更に第二三卷中に載す、其他は應用上の必要に従て、起例法を分載し、説明し在り、其處に就て詳に知悉するを得べし、

甲子		丙子		戊子		庚子		壬子	
祿勳 火土 官印 木燕 玉堂 木丑 文魁 月羅 文昌 巳 催官 金	祿勳 木水 喜神 羅天 科名 木空 亥戌 擊遊 午子 歲殿 木	祿勳 木火 喜神 羅天 科名 木空 酉申 擊遊 辰戌 歲殿 寅	祿勳 火土 喜神 羅天 科名 火空 酉申 擊遊 辰戌 歲殿 寅	祿勳 土火 喜神 羅天 科名 土空 未巳 擊遊 申寅 歲殿 辰	祿勳 土火 喜神 羅天 科名 土空 未巳 擊遊 申寅 歲殿 辰	祿勳 水金 喜神 羅天 科名 水空 辰巳 擊遊 午子 歲殿 午	祿勳 火金 喜神 羅天 科名 火空 辰巳 擊遊 午子 歲殿 午	祿勳 日喜 神李 天厨 酉天 金貴 元木 祿元 水	祿勳 水壽 元木 科名 水空 卯寅 擊遊 辰戌 歲殿 申
申	申	申	申	申	申	申	申	申	申
地殺 白虎 指背 大殺	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆
卒殺 天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗
天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗
天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗

乙丑		丁丑		巳丑		辛丑		癸丑	
祿勳 火土 喜神 羅天 科名 火空 酉申 擊遊 辰戌 歲殿 寅	祿勳 木水 喜神 羅天 科名 木空 辰巳 擊遊 午子 歲殿 午	祿勳 火土 喜神 羅天 科名 火空 酉申 擊遊 辰戌 歲殿 寅	祿勳 木水 喜神 羅天 科名 木空 辰巳 擊遊 午子 歲殿 午	祿勳 土火 喜神 羅天 科名 土空 未巳 擊遊 申寅 歲殿 辰	祿勳 火土 喜神 羅天 科名 火空 酉申 擊遊 辰戌 歲殿 寅	祿勳 木水 喜神 羅天 科名 木空 辰巳 擊遊 午子 歲殿 午	祿勳 土火 喜神 羅天 科名 土空 未巳 擊遊 申寅 歲殿 辰	祿勳 日喜 神李 天厨 酉天 金貴 元木 祿元 水	祿勳 水壽 元木 科名 水空 卯寅 擊遊 辰戌 歲殿 申
申	申	申	申	申	申	申	申	申	申
天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆	天殺 天厄 欄杆
天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗
天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗
天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗	天狗 天狗 天狗

甲寅		丙寅		戊寅		庚寅		壬寅	
祿勳 寅火 官印 木 玉堂 巳 文魁 月 羅 文昌 巳 羅 官金	祿神 木 喜神 羅 天厨 巳 天嗣 月 貴元 水 祿元 未	仁元 木 壽元 水 科名 木 空亡 丑 擊遊 申 歲殿 寅	祿勳 巳木 官印 火 玉堂 酉 文魁 亥 羅 文昌 申 羅 官日	祿神 計 喜神 天厨 子 天嗣 亥 羅 貴元 水 祿元 水	仁元 火 壽元 火 科名 火 空亡 戌 擊遊 申 歲殿 辰	祿勳 計 官印 木 玉堂 午 文魁 未 羅 文昌 亥 羅 官申	祿神 金 喜神 天厨 寅 天嗣 未 羅 貴元 水 祿元 水	仁元 金 壽元 木 科名 金 空亡 午 擊遊 辰 歲殿 申	祿勳 亥計 官印 木 玉堂 巳 文魁 未 羅 文昌 寅 羅 官月
天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄
天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄
天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄

乙卯		丁卯		己卯		辛卯		癸卯	
祿勳 卯水 官印 月 玉堂 申 文魁 日 羅 文昌 午 羅 官水	祿神 水 喜神 計 天厨 午 天嗣 水 貴元 水 祿元 火	仁元 水 壽元 火 科名 水 空亡 丑 擊遊 卯 歲殿 辰	祿勳 午金 官印 月 玉堂 酉 文魁 計 羅 文昌 酉 羅 官羅	祿神 羅 喜神 水 天厨 巳 天嗣 計 羅 貴元 水 祿元 日	仁元 火 壽元 火 科名 火 空亡 戌 擊遊 未 歲殿 午	祿勳 午火 官印 火 玉堂 申 文魁 金 羅 文昌 酉 羅 官亥	祿神 火 喜神 天厨 申 天嗣 火 貴元 水 祿元 日	仁元 土 壽元 土 科名 土 空亡 申 擊遊 巳 歲殿 申	祿勳 酉金 官印 計 玉堂 午 文魁 土 羅 文昌 戌 羅 官土
天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄
天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄
天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄	天解 神 浮沈 血刃 破碎 天厄

甲辰			丙辰			戊辰			庚辰			壬辰		
祿勳	火	官印	祿勳	火	官印	祿勳	火	官印	祿勳	火	官印	祿勳	火	官印
神	木	天厨	神	木	天厨	神	木	天厨	神	木	天厨	神	木	天厨
元	水	壽元	元	水	壽元	元	水	壽元	元	水	壽元	元	水	壽元
火	天厨	科名	火	天厨	科名	火	天厨	科名	火	天厨	科名	火	天厨	科名
空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空
文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌
未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未
羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅
官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火
水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水

乙巳			丁巳			巳巳			辛巳			癸巳		
祿勳	火	官印	祿勳	火	官印	祿勳	火	官印	祿勳	火	官印	祿勳	火	官印
神	木	天厨	神	木	天厨	神	木	天厨	神	木	天厨	神	木	天厨
元	水	壽元	元	水	壽元	元	水	壽元	元	水	壽元	元	水	壽元
火	天厨	科名	火	天厨	科名	火	天厨	科名	火	天厨	科名	火	天厨	科名
空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空	空
文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁	文魁
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌	文昌
未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未
羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅
官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官	官
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火
水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水

甲午			丙午			戊午			庚午			壬午		
祿勳	寅火	官印	祿勳	巳土	官印	祿勳	巳土	官印	祿勳	申水	官印	祿勳	申水	官印
木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木
未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未
文魁	月	文魁	文魁	月	文魁	文魁	月	文魁	文魁	月	文魁	文魁	月	文魁
羅	月	羅	羅	月	羅	羅	月	羅	羅	月	羅	羅	月	羅
文書	申	文書	文書	申	文書	文書	申	文書	文書	申	文書	文書	申	文書
申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申
催官	金	催官	催官	金	催官	催官	金	催官	催官	金	催官	催官	金	催官
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
孤神	申	孤神	孤神	申	孤神	孤神	申	孤神	孤神	申	孤神	孤神	申	孤神
申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申
卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴
五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼
切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺
亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破

乙未			丁未			巳未			辛未			癸未		
祿勳	卯木	官印	祿勳	午火	官印	祿勳	午火	官印	祿勳	酉金	官印	祿勳	酉金	官印
木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木
未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未	未
文魁	月	文魁	文魁	月	文魁	文魁	月	文魁	文魁	月	文魁	文魁	月	文魁
羅	月	羅	羅	月	羅	羅	月	羅	羅	月	羅	羅	月	羅
文書	午	文書	文書	午	文書	文書	午	文書	文書	午	文書	文書	午	文書
申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申
催官	水	催官	催官	水	催官	催官	水	催官	催官	水	催官	催官	水	催官
水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水
孤神	申	孤神	孤神	申	孤神	孤神	申	孤神	孤神	申	孤神	孤神	申	孤神
申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申	申
卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴	卒暴	酉	卒暴
五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼	五鬼	戌	五鬼
切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺	切殺	亥	切殺
亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破
破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破	破	子	破

癸酉		辛酉		巳酉		丁酉		乙酉	
仁元	木壽元	祿勳	子難官印	仁元	金壽元	祿勳	午官印	仁元	木壽元
木壽元	金科名	祿勳	子難官印	土壽元	木科名	火壽元	木科名	水壽元	木科名
木壽元	木空亡	木壽元	木空亡	土壽元	土空亡	火壽元	火空亡	木壽元	木空亡
亥戊	亥巳	亥戊	亥巳	亥戊	亥巳	亥戊	亥巳	亥戊	亥巳
亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳
亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳
亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳
亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳
亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳
亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳	亥巳

〇六十年間吉凶神殺表

七三

七一

壬申		庚申		戊申		丙申		甲申	
仁元	水壽元	祿勳	亥計官印	仁元	金壽元	祿勳	巳官印	仁元	木壽元
水壽元	金科名	祿勳	亥計官印	土壽元	木科名	火壽元	火科名	木壽元	木科名
水壽元	木空亡	木壽元	木空亡	土壽元	土空亡	火壽元	火空亡	木壽元	木空亡
亥戌	亥申	亥戌	亥申	亥戌	亥申	亥戌	亥申	亥戌	亥申
亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申
亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申
亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申
亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申
亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申
亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申	亥申

〇六十年間吉凶神殺表

七一

癸酉		辛亥		巳亥		丁亥		乙亥	
仁元	祿神	仁元	祿神	仁元	祿神	仁元	祿神	仁元	祿神
水	月	金	煞	土	火	火	羅	木	水
壽元	官印	壽元	官印	壽元	官印	壽元	官印	壽元	官印
水	火	金	木	土	土	羅	火	火	計
科名	天厨	科名	天厨	科名	天厨	科名	天厨	科名	天厨
水	亥	金	午	土	申	火	巳	木	午
空亡	天厨	空亡	天厨	空亡	天厨	空亡	天厨	空亡	天厨
丑子	土	卯寅	辰月	巳辰	火	未午	計	酉申	水
擊遊	貴元	擊遊	貴元	擊遊	貴元	擊遊	貴元	擊遊	貴元
酉卯	水	酉卯	水	酉卯	水	酉卯	水	酉卯	水
歲殿	申	歲殿	申	歲殿	申	歲殿	申	歲殿	申
月空	巳	地解	午	紫微	未	地解	申	地解	酉
關杆	披頭	暴敗	天厄	六害	華蓋	白虎	切殺	天狗	披麻
辰	破	煞神凶吉年亥				酉	天狗	酉	六害
小耗	明殺	血忌	血支	產星	赦文	爵星	歲駕	科甲	命主
卯	飛符	木	火	火	水	亥	木	戌	病符
五鬼	寅	丑	子	子	子	子	子	子	子
天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符

壬戌		庚戌		戊戌		丙戌		甲戌	
仁元	祿神	仁元	祿神	仁元	祿神	仁元	祿神	仁元	祿神
水	日	金	金	土	土	火	火	木	木
壽元	官印	壽元	官印	壽元	官印	壽元	官印	壽元	官印
木	水	金	金	水	水	土	土	木	木
科名	天厨	科名	天厨	科名	天厨	科名	天厨	科名	天厨
木	酉	金	寅	土	午	火	子	木	巳
空亡	天厨	空亡	天厨	空亡	天厨	空亡	天厨	空亡	天厨
丑子	金	卯寅	辰月	巳辰	火	未午	計	酉申	水
擊遊	貴元	擊遊	貴元	擊遊	貴元	擊遊	貴元	擊遊	貴元
丑子	水	丑子	水	丑子	水	丑子	水	丑子	水
歲殿	申	歲殿	申	歲殿	申	歲殿	申	歲殿	申
月空	巳	地解	午	紫微	未	地解	申	地解	酉
天殺	天官	天殺	天官	天殺	天官	天殺	天官	天殺	天官
辰	破	煞神凶吉年戌				酉	天狗	酉	六害
大耗	明殺	血忌	血支	產星	赦文	爵星	歲駕	科甲	命主
卯	飛符	木	金	木	木	金	戌	火	對宮
小耗	寅	丑	子	子	子	子	子	子	子
天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符	天符

十一宮吉星凶神註解

十二宮吉星凶神註解

祿動は左を祿と爲し、右を勳とし、入垣又は入廟は崇し、
 文魁は左を文と爲し、右を魁星と爲す、文章を主り天下に
 魁たり、
 官印は左を官と爲し、右を印星と爲し、貴人に宜し、
 文昌星は入廟は貴く、火年の者は聰明にて顯達せり、
 玉堂は左を晝生と爲し、天乙貴人と云ふ、右を夜生と爲し
 玉堂と曰ふ、
 催官此星は叙任に利しく、遷官に宜し、我進て任に赴く、
 赦文此星の命は母星、入命は一生吉とし、悪を化して善と
 爲す、

天解地解は命限に到るは能し、一切凶神を解て吉神に化
 せり、
 扳鞍驛馬此二星は同命限に到るは、少年に騰達せり、
 月解此星に遇者は、凶を化し吉と爲すなり、
 科甲科名は名利文章共に宜く、選舉に赴くべし、
 紫微此星命限に入るは、近貴を主り能く凶神を壓す、
 登籍即歲殿此星に遇者は、人命近貴を主るなり、
 福星は貴人と同しく、福祿の事を主る、
 天德は此星は月徳と同く命を守るは、一生吉利有り、
 月徳は此星は天徳と同しく命を守るは、男女共に貴く、又
 殺星を壓する威有り、
 天嗣は子孫星と爲し、子孫の榮昌を主るなり、

天喜喜神は命限に在るは信の主にて喜事有るべし、
 紅鸞は此星は喜悅の事有り血膿の災を免る、
 太陽太陰は能く凶星を制壓の威力有り、
 祿神は正祿と爲し之に遇者は俸祿を食むべし、
 爵星は爵祿に遷るの事を主る善星なり、
 龍德は能く凶を化し吉と爲して衆殺神を壓すべし、
 將星は天德三台に準しく前に驛馬鞍在るを喜ぶ、
 天厨は食物天祿を主る是殺宮に入るなり、
 歲駕は歲星にて其土に會は尤も妙と爲す、
 三台は利用の喜び有るを主る、
 歲合は吉星に合は福と爲し凶星に合は凶と爲すべし、
 月空は凶を化し吉と爲すべし、〔以上吉星に屬す〕

〔票倍きりごし〕

太歲は若し命限主に到るは不測の災厄來るなり、
 空は諸殺の空亡に逢は吉命限の空亡に逢は凶と爲す、
 的災殺は官非喪孝破財とし命宮此に値は祖業票倍せり、
 亡却は盜賊失脱を招て事を益を主る孛星同く命を招は
 外出を忌むべし、
 劍鋒は身命に之に値て更に年に加り限に之に値は十に
 惡死す、
 欄杆は傷殘自縊の事を主る故最も命限に到るを忌なり、
 擎遊は刑尅は灾病に罹る左は擎天と爲し男に忌む右は
 遊變と爲し女に忌む、
 官符飛符は命限の此宮に値は灾横事日時に同到を忌む
 べし、

病符、死符は命限之に逢は争訟否事を主る、則ち災病なり、
 披麻披頭は喪事幼に双親を失て家事寧からず、
 約絞貫索は官災徒流等の官災女難有るべし、
 天空は命限に到る天空に逢はざるは任官に利しと爲す、
 天地殺は官非喪孝横禍、口舌是非の事故有るべし、
 卷舌は官非横事有るを主る、子有るも不肖と爲す、
 白虎は官事及び病患破財を主るなり、
 飛廉大殺は打架の事意死を主るべし、
 血支血忌は男は血大災を主る、女は疾患を忌む、
 天狗は若し此宮に入るは子無し流年に命限に在るは刀
 斧の血殃を主るべし、
 大耗小耗は財寶聚らずして財物を耗散するなり、

孝服は不幸の
 凶事の類なり

黄旗豹尾は纏綿として病災在り、六畜を損し破財有り、
 喪門地喪は孝服を主り破財の事有り、
 破碎は官事及び破財の事有るなり、
 天哭は孝服を主り家宅寧からず、
 年月殺は非災横事に遇なり、
 伏尸は懐り血刃落身を主るべし、
 浮沈は此殺は人命限に在るを忌む、符昭は水厄有り、
 卒暴は命限主に入る人は兇惡にして災を主る、而るに吉
 多く害なしと云、
 産星は血支は産に忌む、〇血刃は同上なり、
 陰殺は秋は破財有り、帝皇の事なり、
 暴敗は官事に家財を破る、身命に犯を忌むべし、

吞陷は、六親を妨害し難は骨肉に有りと爲すも、大に忌ま

ず、六害は六親を刑陷し、朋友に無情有て親まざるなり、

〇右註解は各宮の定局を明にして、六十年間の吉凶神殺

を以て、便ち逐年命中の善悪休咎を查究し、或は立命某宮

は即ち命宮に從て起し、本生年を逆に轉輪て太歳に至る、

即ち是小限何星神有り、一歳の凶危を知る、又小限宮に從

て起し、正月は即ち是月限にて、一月の否泰を知るべし、

又貴命を論じ、未だ登科せざる者は、科甲科名等の星に値

が如き、或は官祿に到り、或は命宮に到る、則ち士子は金榜

に登るを知り、或は催官官印、祿勳等星の命限に到るは、則

ち仕官は官を進級して、爵位を加るの名譽の榮を享る有

小限月限等は
第二卷に詳
かなり、

天盤法通加圖
解、

子年生の例、
十一曜を其支
に寫し様は、
次項の人盤を
見れば了解す
べし、
猶九曜喜忌定
局圖を併看る
べし、
地盤の上に火
星とは十二支

り、此理甚だ明なり、

天盤通加之圖解

天盤の法は酉上より順逆に加ふ例、ば子を以て酉を加へ、
丑に戌を加へ、寅に亥を加へ、卯に子を加へ、辰に丑を加へ、
巳に寅を加へ、午に卯を加へ、未に辰を加へ、申に巳を加へ、
酉に午を加へ、戌に未を加へ、亥に申を加へ、其訣要は天地
盤に各子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の支有り、此故に子宮
立命の者は、天盤に卯在るを以て、地盤の卯に對し、然る後
に十一曜を其支に寫し、曜を定む、地盤の上に火星の如き
は、地盤に卯在り、是天盤の卯に亦相對する故、一の火星を
寫して、諸煞を天地盤に各一星を寫し、却て天盤の卯を以

に五行在る故なり、支の五行は第二卷に起例在り、且又十干變曜定局圖を看て知るべし

地盤法、通關圖解、

子宮立命の例猶起例は第二卷第三卷第四卷に詳述在るを参看すれば明なり、

て子を加ふ若し吉星を加ふる如きは多く凶に逢て吉に化し、凶星に逢者は多く一世間中遭磨するの類なり此に依て統て斷れば差謬無し猶別圖を對照して知了すべし、

地盤通關之圖解

其法は卯上より子を起し、逆限に子を以て卯に通し、丑は寅に通し、寅關は丑卯關は子辰關は亥巳關は戌午關は酉未關は申申關は未酉關は午戌關は巳亥關は辰と爲す子卯と相通し、丑寅と相通し、辰亥と相通し、戌巳と相通し、午酉と相通し、申未と相通なり、例ば子宮立命の者は通關は卯舌に在り、卯宮の六十年間の吉凶神煞を看るべし、卯宮に祿元歲駕貴人文昌天厨天月二德紅鸞天喜解神等有り、

及び火羅喉の命母諸吉有るは是則ち一生吉利有り、若し羊刃亡神劫煞に通ずる如きは則ち破碎煞氣鬼星并に諸般の惡曜凶殺有る者は則ち一生逆蹇と爲す、學者切に宜く仔細に之を推せば吉凶驗在らざる無し、

此天地盤の法は一生の禍福の大牀を知る圖なり、故に此圖の練習を能く努むべし、

起五星一人盤虛實之圖解

起五星一人盤法虛實圖解、空亡の例、

此法は四柱の旬中空亡を以て取る所の陽干を空と爲し、陰干を亡と爲す故に、陽干の空占は陽宮と爲し、陰干の亡占は陰宮を以てす、天干の甲丙戊庚壬を陽と爲し、乙丁巳辛癸を陰と爲す、今

生年壬申、
生月丁未、
生日戊戌、
生時甲寅
例

虛實の例

例は壬申年丁未月戊戌日甲寅時を以て式例と爲すに、生年は甲子旬を取るに戌亥無し、戌土は一空と爲し、生月は甲辰旬に寅卯無し、卯上を是二亡と爲し、生日は甲午旬に辰巳無し、辰是三空とし、生時は甲寅旬に子丑無し、子は四空なり、四柱に取る地支を四實と爲し、上に申宮在るを一實と爲し、月上の未宮を二實と爲し、日上の戌宮を三實と爲し、時上の寅宮は四實と爲す、命限に入る貴人祿馬主星の實地に在る、是則ち吉と爲し、仇火羅入煞曜が實地に在るは、是則ち凶なり、
例證の命は生年の申を命宮と定め、生月の未を財帛宮と定め、生日の戌を福德宮と定め、生時の寅を妻妾宮と定める者なり、亦仇火羅の煞曜の起例は、後項の九曜喜忌定局十

天地人盤の訣
通關の例、

千變曜定局の兩圖を併見て知るべし、是即ち五星起例と爲すなり、
別説に曰く、天地人盤を識る者稀なり、寔は生虚を尅すべし、夫れ天盤は加盤にして、地盤は通關なり、亦人盤は是原と守宮にて、此虚は空亡の虚に非ず、此寔は四柱の寔に非ず、蓋し吊起を虚と爲し、原守は寔と爲すなり、盤法の如きは、子に卯を加へ、卯は午を加ふ、辰に丑を加へ、巳に寅を加ふ、通關法は丑寅に通じ、寅は丑に通ずるの類は、前に述るが如し、尅生虚の中に子宮命の如きは、寅限に行り、木炁星に遇を凶と爲し、若し加盤に巳火を得る、通關丑土の曜は、乃ち伏忌化難を以て、反て是發通の地と爲す、若し二官に金有り、則ち難災を制する水有て之を助く、禍火の餘と

羅は羅喉、

爲す其れ或は巳宮本と丑宮有り悉の限有て寅に至る暗
 に逢を煞難は必ず災厄を致す但金を得て寅在るは能く
 悪を制し反て更に吉福限と爲す若し寅宮に水を得るは
 當に煞と爲すべし羅曜に火星を重るは化を爲すべし難
 禍は却て輕し餘は此に倣へ大抵天地盤は虚と爲し人盤
 は寔と爲す是寔は生ずべく空尅は虚にて則ち虚は生ず
 る能はず寔尅は寔なり並に惡煞無を云何そ天機を滅す
 安んぞ洩すべけんや身命の二宮は大小の二陽に並に惡
 煞無く忽然に死者有り乍ち必ず是弔盤の土は暗伏拱夾
 の中に忌曜に逢ふ故なり命限は當に空は反て發弔を致
 し盤中に間活すべし當に生流年の星煞は俱に身命限主
 を照し弔盤主は暗に生助を加ふ星に祿馬貴人を照さゞ

二盤の苦は克
 之を明にし
 て造先なり
 祿星命を察す
 天の髓を泄に
 非ずして何ぞ
 哉

る故に吉事を致すなり生曜臨官は殃を作し暗地に其傷
 を受く弔身弔限は亦弔命の禍福は明に鏡の如し凡そ恩
 官祿福德に臨む本と吉令は反て殃を作す是必ず弔盤中
 に暗に刑傷を受るを以て致すなり惟二宮を然りと爲す
 に非ず若し身命限官は弔盤に逢て生助尅制有り則ち福
 を爲し禍災を爲し其意は猶盤を照すに妍媸の如し弔起
 飛來て明に此理を泄は却て天の髓なり此申土文の意は
 加盤主に星辰有る如きは皆能く弔起し照す拱膽合し飛
 來るの神功の妙用は寔に可曜なり世人口を開は重を官
 と爲し提起し君と官を爲すを見る福基を要すべし福薄
 は難久しく叩く凡そ星推家は官と爲さざる無し尙と爲
 すなり殊に官を爲すを知らず福德官を要すべし吉に遇

て生坐寔に逢ふ、高強は則ち能く悠久の福を享く、若し根
 基の淺薄は虚弱の難に榮華は亦久遠に傳る無きなり、
 以上天地盤の法は初學が一讀の下に運用を爲し難
 しと雖も斯法に由て禍福を見る根基なる故、尤も熟
 練を要す、之が運用の自在成る能はざる者は、以下諸
 項を解決を誤る虞れ在り、且亦前掲載の別説以下の
 文の如きは、本卷を了解せる後に讀むべき、高尚の論
 を茲に一括せし故、一層至難く思ふ要點も有らん、然
 れども數回精讀すれば解するに至らん、彼の至難く
 思ふ件は漸次卷を讀終に從て悉く了解爲すべし、特
 に婆言を附す、

九曜喜忌定局
之圖解

九曜喜忌定局之圖解

此圖は周天曆の生用を論する、圖解は左の如し、
 一主とは〇立命を主星と爲し、主は我なり、
 一難とは●我を尅する者を難と爲せり、
 一仇とは●我を尅する者を仇と爲し、
 一恩とは〇我を生ずる者を恩と爲す、
 一用とは〇我が生ずる者を用と爲し、又同類を忌なり、
 假ば子丑命宮の者は、土星が主にて木炁を難星とし、水
 星は仇星とし、火羅は恩星と爲し、金星を用星と爲す、是此法
 は緊要の事に属す故、能く運用を大切に爲すべし、

十幹變曜定局之圖解

計躍は計都を云、羅曜に羅喉を云、

強弱宮

十幹變曜定局之圖解

十幹に星曜が値ふ處に由て、吉凶星に變曜するを云
 假は甲干に○吉曜となるも、乙干に●凶曜と成るの
 類有り、是即ち年干甲生は火星に値は○祿曜と爲し、
 孛星に値は●暗曜と爲し、木星に値は○福曜と爲し、
 金星に値は●耗曜と爲し、土星に値は○陰曜と爲し、
 月星に値は○貴曜と爲し、水星に値は●刑曜と爲し、
 炁星に値は○印曜と爲し、計躍に値は●囚曜と爲し、
 羅曜に値は○權曜と爲す、乙干に孛星が値は○祿曜
 と爲すの類なり、以下之に倣へ、
 此星辰に強弱宮在り、故に強宮の納音に臨官、帝旺在る、

強宮は大富

弱宮は資財耗散す

貴人は吉神の稱

命は、則ち富貴なり、官祿宮に入り、官魁、文星の身命に逢會
 は、發達すべし、又強宮に入る者は、大富を主る、若し弱宮に
 在るは、資財耗散に聚と散有り、此故に、耗財を忌む、田財宮に入
 るは、資財耗散せん、○亦生旺宮に妻財を得、死絶宮は、疾病
 多し、空に値ふ強宮は、貴子の生産を主る、遷移、奴僕宮は、過
 居を主る、○閑遊宮は、徳星犯す、無く、奴婢を得て、力無く弱
 し、強宮に入るは、多く祖業に就く、師地は、祖業を得ざるな
 り、命主に入るは、傷死、膿血の患在て、喜ばざるなり、○月主
 に、遇は、貴く、福祿入廟し、順行は、貴人の扶持在り、猶強弱宮
 の區別等の詳細は、序を逐て述る處に就て、知悉すべし、

生時の必要

竹羅三限定局圖解

竹羅の稱は未だ考る違無か唯名稱と解す三限とは
初限と中限と末限との三限を云定局とは四柱に三
合を以て分ち、火局寅午戌水局申子辰木局亥卯未金
局巳酉丑の三合局を以て其定局と爲す蓋し三合の解
は已に拙著に詳細に在る故再辨せず又此圖は生時
の晝夜に由て星神を定め限行に差異在る故生時を
知るを要す而るに往々之を知らざる者多し幸に父
母の現存者は疾く調査すべし流布の推命術と雖も
生時不明者は斷定する事難し況や斯術に於ては天機
靈妙の極秘を知るも福福を精確に斷め難き故なり

假は寅午戌の
何れの安命宮
の者も、晝生
の初限は日曜
とし三歳限を
起し三十年を
行る、中限は
木曜とし、三
歳限を起し、三
廿八年を行る
末限は土曜と
し、五歳限を
起し廿六年を
行る、以下之
に倣へ、

竹羅三限の起例は金星四歳と爲し、土星五歳と爲し、木星
三歳と爲し、水星一歳と爲し、火星二歳の數と爲す、太陽元
は是火精にして、太陰は却て是水の副なり、二星法は水火
の行るに取る、便ち是竹羅三限の數と爲す、此法假ば日生
の人の如きは寅上を安命と爲し、寅午戌芳日木土にて、太
陽は午木星に在り、戌土星在り、子午在り、便ち午上に從て起
る二歳逆行は十二歳に辰在り、二十二歳と寅に在り、二十
三歳は却て四卯に順行して、一年一宮にて三十歳に至て
戌上に木星を過て中限に交る、却て住三年、此を以て例と
爲す、沐浴死絶墓の地に行を忌む、又云く寅午戌の方は、日
木土、亥卯未の方は、火金月、申子辰の方は、土水、巳酉丑の方
は、月金、火日生は、太陽と爲し、夜生は、太陰にて、己土に有り

夜生は太陰、

各三星は宮力三方の主なり、

○童限満關行大限圖

九六

童限満關行大限圖

童限とは小兒間の限にて生年より十五歳に至る禍福を知る法なり故に十五歳に滿て是即ち満關と成る關とはせき所謂城寨の門の如く人世の關門を越て其年に達す夫より十六歳以上廿一歳三十二歳と順に循環するを大限を行ると云是其操格の圖なり、
 注意此童限満關の大限を行る圖及び次項の命宮躔度の幾歳出童限の大限を行ると金剗度の三圖の起例法は一讀に明め難し故に初學者の爲に應用法を簡易に會得せしめんと欲し能く工風を凝したるも

童限満關行大限圖

此圖の外圍と又内圍に支在り、其支に數字は年齢にて、是行順行の符合なり、順行して酉に至り、飛で元の上へ順に辰巳と上る、外圍を行

是即ち本書の難關なる故に結局仔細に幾回も熟讀して圖を熟煉に到れば遂に自在に解決するを得ん、
 飛限口訣歌に曰く、一に命宮、二に財帛、三に疾厄、四に妻妾、五に福德と順行に流て、六歳は却て宮位に従て其位を循環して、十五満童を周るなり、
 假ば一命五月申時生の如きは、太陽畢宿の八度に躔る申在り、即ち申宮に畢宿八度を起す例ば、將量天尺圖を參看すべし、生時を上より數て下に至る處の卯に逢て止り係る、卯宮は氏宿三度に在り、即ち是安命卯宮に値ふ、氏宿三度は童限の一歳に躔る、命宮は飛て二歳を起す寅の財帛宮在り、此圖を見るべし、飛て五歳に福德に至り、則ち順行して十五歳に卯に到り止る、辰宮は是即ち大限の地に行

○童限満關行大限圖

九七

行るは大限の
地なり、
又命限は十五
年と爲す法な
るか、後項に
記す
出童限分に値
ふ云々は、別圖
の命宮躔度、
幾歲出童限圖
を參看を要す

る量天尺圖の安命を看るに、氏宿三度の下は圖下段ノ乃ち
十一歲在リ出童限分に値ふ金氏宿の三度は計都を怕る、十
一歲就て大限に行る、辰十一歲より二十一歲に辰を出て
二十一歲に巳に入る、依て後圖に逐宮數に行り去る、其餘
は此に倣ひ知るべし、
又云く、一に命宮、二に財帛、三に疾厄、四に妻妾、計都、五に福
祿、六に官祿と順行に、地支を輪り向ふとは、○童限の一歲
に起る命宮を數て六歲に至り、官祿官財に到る、順行して
十五歲なり、又命宮に到る滿限十六歲以上は、是大限の地
に入る事は、前圖に有り、又飛陽圖に十歲より飛て十一歲
に至る、其餘は自ら順行の數なり、

命宮躔度幾歲出童限行大限
過宮量天總尺圖解

量天總尺圖解

命宮とは生年の支を云、假は子年は子宮と云、躔度と
は其支宮の躔度を云、童限を出て大限に行る、過宮の
度數を知る爲に、十二支に二十八宿度を配す、其宿度
に廣狹在る故、一度より五度に次度に移る有り、或は
一度より十度に移る、或は十八度にて移る等、各宿に
差在るも一目に知る圖なり、且亦一支を三十度と定
め配したる者なり、
又下段の圖は命貌、福官、遷疾、妻、奴、男、田に分ち在り、運用法
は上段の圖に前例の五月申時生畢の八度に躔る、又上よ

命は命宮、貌は相貌、福は福徳、官は官禄、遷は遷移、疾は疾厄、妻は妻妾、奴は奴婢、男は男、女は女、田は田宅を云なり、

十二命宮金剋度圖解

り數て卯に逢止り卯宮の氏三度より下段の圖を看れば命貌等在り命と横行に在る數字は是即ち年齢にて十一歳と在り夫より十二歳と漸次二十歳に至る又次の貌は二十歳より三十歳其次福徳は三十歳より四十一歳に至る等以下之に倣へ斯の如く運用する者なり之に由て其各宮を循環して過る事を量る故に過宮量天總尺と云圖は別に製して附し研究に便ならしむ猶大限に係る事は前行大限圖を對照すべし、

十二命宮金剋度圖解

十二命宮とは十二支を云又支に二十八宿度を配するは前圖に準じ金剋度とは剋は字書に削なり除な

三關剋度起例
三關とは初關
中關末關を云
初交の一二歳

りと在り是小兒の間に關門在るを云生年生時の關係に由て禍福を異にして凶命の者は貧福を論ぜず命を削る度と云意なり是即ち初關中關末關の三關を過を云圖の運用法は起例に詳なり、此法は我國に曾て運用せし者無く小兒の成長期中に係る禍福を緻密に調査するは此剋度法を以て祖と爲す是何ぞ小兒にのみに止らず一生の禍福を知るも亦然り此圖は別に製し附す三關剋度の起例は左の如し、

凡そ子午辰戌の四限は該二度三釐と算て初交は一度二度を一歳と作し關起して三度四度五度を二歳と作し起す六七度を三歳と作し起す深く交り十一度を五歳と作

中は皆同じ、三四歳後方は、淺深を見る度、數の起例は、命宮應度圖を見るべし、

し起す、二十一二度を十歳と作し、關起し、第二年を初關と爲し、禍福を見る、第四年中關に入る、第七年に中關を正過し、第十年に末關に入る、關尾を脱る處是なり、若し之か難星なれば死を主るべし、〇卯酉丑未の四限は、該二度四釐と算て、初交度は前法に同じ、第三年半に中關に入る、第六年に中關を正過す、第九年半に末關に入る、寅申の二限は、該二度五釐と算て、初交度は前法同じ、第三年半に拘らず、中關に入り、第六年半に中關を正過す、第九年半に金の末關に入る、巳亥の二限は、該二度と算て、初交度は前法に同じ、深く十度を四歳と作り起す、二十度を八歳と作り、關を起し、四年半に中關に入り、第十一年に末關に入る、

甲子年危宿十二度十一度、乙丑年危宿十度九度の例の如し、此假有るは學者知り易し、

三方は申子辰寅午戌の類、四正は子午卯酉の四方を云

假ば子限の流年を行は、是甲子年は子宮の宿度を以て、躔り、二度三度と躔るを一年と作り、甲子年に危宿十二度十一度を行は、乙丑年は危宿十度九度に行は、丙寅年は危宿八七六度に行は、其餘は數に依て推算すべし、但し十二宮分金剋度圖を參看せば、能く了解すべし、或は三方、四正、吊合、飛來、難忌、仇星、或は填、或は冲、或は關頭、關尾、天津、暗金、算て、煞の輕は、則ち官非、刑破の重るは、身北邱に屬せん、仔細に之を推せば、甚だ驗あり、猶次項の詳説を併看れば、一層明なるべし、

三方四正對照難星吊度

三方とは申子辰等の三合會局の類を云、四正とは子

吊度、
金剝度圖と過宮量天總尺圖を併せ看るべし、

午卯酉の四方に在る支を云、對照とは子と午と對照するの類を云、難星とは字の如し、吊度とは星辰の循環して、時に吊度に至るを云なり、是亦前の命宮躔度圖等を解したる者と知るべし、
歌に曰く、命貌福妻を三度と算て、官厄遷移は四度半と爲し、奴僕田財は閑極の宮、六度を歳と爲し、相吊を看る、假ば立命子宮の如き、女宿四度は木星を難値と爲し、當に生原木星は戌宮の奎宿八度に在り、十歳に滿童限を出門し、十一歳に丑限を過て、二十一歳に寅限を過ぐ、寅午戌の三合は、原と木を難と爲し、寅は福德宮と爲す、三度を以て一歳と作し、算て戌宮より胃宿三度と數て、胃二度に向て奎宿の八度に至る、二十四度在るを八歳と作し、算て二十

對照は子午の類

一歳を以て寅を過ぐ、此八歳を加る、共に二十九歳有り、是二十九歳上に吊木難星次に三十二歳に卯限を過ぐ、四十七歳に辰限を過ぐ、辰戌又相照し、前木難の辰を遷移宮と爲す、四度半を以て一歳と作し、亦戌宮より胃宿三度四度を以て、一歳の數と作し、奎宿八度に至るに五歳有り、四十七歳を以て、辰を過ぐ、此五歳を加て、是五十二歳に復吊水難是なり、此に於て吉凶定る、三合對照吊難度は、此に依れば失無し、餘命は此に倣ひ推すべし、

天津例

天津とは是星辰の稱にて、北極總星圖に星象及び位置等も明に在り、此星に逢を忌む、其起例は左の如し、

天津例、

是亦前圖に附屬する解なり、天津所を問ふ、原住は酉卯并に午子なり、酉は昴宿午星休に遇行る卯は房宿子は虛宿此に逢ふ莫れと、○子宮は虛宿日鼠午宮は星宿日馬卯宮は房宿日兔酉宮は昴宿日雞、此之を天津と謂なり、

暗金例

暗金神、

亢宿の金龍、鬼宿の金羊の類は天禽の稱

暗金とは暗金神を云、暗中に在る金神の起例なり、是亦前圖に附屬する者と知るべし、

暗金神の歌訣に曰く、君若し暗金神の推究は、未戌を尋て丑辰に到るべし、未鬼宿戌婁宿は誰か愛を立つ、丑牛宿辰亢宿は那ぞ臨に堪ん、○辰中に亢宿金龍と未中に鬼宿金

耕と、戌中に婁宿金狗と、丑中に牛宿金牛とは、此伏藏の煞なり、○此論は四季の春は辰を忌み、亢宿の夏は未を忌み、鬼宿の秋は戌を忌み、婁宿の冬は丑牛宿を忌なり、

三關剋度論

三關剋度論、

大理、男は前を探り、女は後に望む、

前三方四正以下の諸例は、出童限及び三關剋度に屬する事なり、今茲に再び剋度を詳論して、運用を自在ならしむるに在り、能く味ふべし、

凡そ男女の行限躔度の關を過る時刻有て、先後同じからず、男の陽命は關後に救有るは凶ならず、陰命は關前に救有れば凶ならず、若し救無は凶を免れ難く、冥司の患有り、女の陽命は關前に救有るは凶ならず、陰命は關後に救有

膠柱鼓瑟は臨機應變の才無を云、

守論は尅星なり、

るは凶ならず若し救無は乃ち投泉の厄有り若し星宿の
遅早或は先き一年を見る者或は後一年に見る者は執滞
るべからず膠柱に鼓瑟して斷を爲すなり其限凶にて悪
星なるは未だ犯さず初關に吉有る者は中關未だ犯さず
亦全吉を獲る直に末關に至る方犯して死者有り其限凶
なるべくして流年に或は流難に逢ひ流仇流忌に逢の類
にて初關の凶の者有り中關末關は其吉慶自然に在るな
り宜く之を細詳に爲すべし經に曰く關前は節後に死し
關尾は節前に亡驗有り從客得る差爲す多し枉爲す金割
に庚戌の水難鎮星を看る分毫を詳にして苟もせず禍福
自ら靈祥なり、

詳論三關之說

衝は沖に同じ

詳説三關之說

曰く子上の初關は危宿十二度中の如し阻虛宿六度末關
女宿二度は首尾出入の度を以て初中末度を分ち三關と
爲し九五度を卒と爲し三合吊者は三度を過す四正を衝
者は一度を過す煞三方の正垣に居る其人は上節に於て
死す煞物關に居るは下節の前に死す上節の後に煞末關
に居るは下節後に死す上節前の一度は節後一日に死す
二度は節後二日に死す三度は節後三日に死す並に度数
に依て日を加演て分上に之を取るに準とならざる有る
こと無し、

此三關は甚だ明め難き圖なり反覆詳論を掲たり能

く精讀するを要す、是生死の大事なる故、特に婆言を附す、

限年分訣論

限度を循環するに、各宮定年在り、其分年の訣を論する規定は左の如し、

命宮は十五年、限宮は十年、福德妻宮は十一年、詳なり、官祿は十五年、最高位にて、遷移の止るは八年限有り、疾厄は七年たり、共に六六三、十六年、財帛兄弟宮は五年、強とし、田宅子孫并に奴僕は、四年、半宛にて、毫芒を定るなり、蓋し毫芒は宮に由て、小大の差在るを云、○限年分法に云、一十七、一十五、八、七、十五、四の數と在り、出門は直に、孛星女宮に至る、

限年分訣論

逐年行限度法、圖を對照せば、明なり、

行年の逐宮は分て度を躐ると云、

限行度訣論

前の限年を循環する、各宮限の行度に淺深在る故、其訣を更に論じたる者なり、各宮に差在る事左の如し、命宮行度は淺深に隨ふ、相貌は一年に三度立つ、官祿は一年に兩度通ず、遷移は一年に三度強、疾厄は一年に四度強、三年の上にく一を加ふ、福德妻妾は三度に移る、三年一を減じ、端的と爲す、奴僕男女并に田宅、一年七度弱、財帛兄弟は各五年、一年六度行て失はず、但能く此に依て行年を論じて、分明に歳々凶吉を加ふべし、以上限度年分の法は、俱に前例に照すに、命宮を推に十五

大抵行限の果は、十一歳を以て行限を起し、遅は即ち二十正月、量天尺七を看る、七宮女宿二三、四度の下の如きは、是十一歳に行る

年は乃ち古法に拘執すべからず此例は十一歳起限の如きは命宮に止る官十年或は零三度三年餘を以て一度行なり○十二歳限を起者の如きは命宮は又十九年を管す約二十六七度有り一年半を以て一度を行る其餘は此に倣ひ之を推すべし

逐年行限度法圖解

逐年とは字の如く別意無し行限度とは行る限度を云此圖は是亦三十度の中を各宮か循環爲するに宮に由て五年に三十度を循環し又は八年に行る在り或は四年半に或は十年に十五年等の差在り圖に各宮の行る年限か録し在る故一目に了解するを得而

逐年行限度法圖解

して各宮の禍福の異なる要點は下文に漸次説明に就て仔細に知悉すべし猶圖は別に製して附す

行限度分秒定訣

行限度分秒定訣は、百秒を一分と爲し、百分を二度と爲す、此十一宮共に合年數の逐年行限度法は、惟命宮に出て

行限度の解は前に述たり分秒定訣とは是又前に謂ふ如く三十度を十一年に八年等に種々に配する故に従て分秒の差有り其分秒の訣を示す事左の如し、福徳妻妾の二限宮は、毎限十一年を管轄し、二度七十二分七秒を行る、四箇月十二日に一度を行る、○遷移限宮は八年を管轄し、一年に三度七十五分を行り、三箇月零六日に一度を行る、○疾厄限宮は七年を管し、一年に四度二十八分五十秒を行る、二箇月二十四日に一度を行る、○奴僕男

帝限財帛は同
じからず、故
に分數を以て
定録する事は
爲し難し、

順行の宮は逆
行の度なり、

○行限度分秒定訣

女田宅の三限宮は、毎限に四年半を管轄し、一年に六度六十分六秒を行る、一箇月二十四日に一度を行る。○相貌限宮は十年を管し、一年に三度を行り、四箇月に一度を行る。○官祿限宮は十五年を管轄し、一年に二度を行る、六箇月に一度を行る。○兄弟財帛限宮は、毎限五年を管し、一年に六度を行り、二箇月に一度を行る。以上行限數を論ずるに、每宮三十度在り、假令は三十八歳正月酉宮に入る、官祿限は畢宿六度は、一年に二度行る、四十一歳正月に畢宿の初度に到る、六月昂宿十度に到る、四十七歳正月に胃宿の十五度に到る、五十二歳に至り酉を出づ、五十三歳戌に入るの類餘は此に倣ひ推す、行限度圖に明瞭なり、猶量天總尺圖を對照すべし、

洞徵大限要秘論

洞徵大限要秘
三方は子申辰
の類、洞徵の
百六天の六
く百已天の六
月にて、大限
は正小限と爲
し、副と爲す

洞徵とは深き境の意をいふなり、大限とは已に録す如く、十六才以上百才に至る間を謂ふ、其間に各宮の循環に値ふ故に、吉凶禍福の起る秘訣を、詳細に論ずる事左の如し、又星名に洞徵と云あり、
夫れ洞徵急なる所の者は、限度にて發する所の者は廟宮なり、輔る所の者は行年にて助る所の者は三方なり、又貴ふ所の者は祿星にて畏る所の者は凶星なり、亦好む所の者は吉星なり、五星の行限吉星の如きは、陷逆は則ち福慢強にて順は福緊なり、凶星の陷逆は災慢強にて、順は災緊なり、行限の吉凶を以て、當に星辰を生ずべし、最重る吉に

三合は寅午戌
亥卯未の類

孛星は慧星、

遇は吉又凶に遇者は凶守限に入は一二年に應封衡を
 見るは三四年に應を見る三合は五六年に應を見る假は
 流年の恩曜の到限は又六歳を得る財帛は當に恩用を生
 ずべし必ず其年月日を主る官を爲す者は超遷の詰救の
 恩を蒙るなり士庶の者は財帛の進益の喜在るを得るな
 り若し小限の上に行るを見るは恩星を生ずる故亦此斷
 に同じ、
 凡そ火土孛星に遇は用星と爲し行限流年に吉星に遇て
 身命に臨は災厄を免るべし但吉星の流年に遇は亦災厄
 見る金星木星炁星に遇が如き吉星と爲し行限は却て行年
 及び身命宮に於て悪星の照臨在るは惟浮災在り然らざ
 れば他人之に應ず蓋し身命の行年に限緊に設る能はざ

忌に取る土計
は災を爲し、
忌限と爲す、

限命の二主は
田旺は強を得
る、何そ殺
刑冲を怕る、

るなり若し一限中に止る一災星は輕し忌星有るは愈重
 かるべし蓋し災慢を忌に於るや例は孛計都を災星と爲
 す如きは行限は剝官喪身憂患疾病有り更に同じく忌星
 は先に災在て後に亡ぶ忌星の限内に福星の照臨有り或
 は是災星と同一祿星は必ず隆盛の意中を主る亡否は僅
 に能く延年して限末に至るなり、
 凡そ人正行は吉限ならずして前後に又是凶星は則ち交
 るを待すして死す木星辰金に交るに遇如きは吉限と爲
 すは交るを待すして前限一年に便ち利名の喜慶有り一
 限中に二災星の照臨有るは災然重併て吉曜有と雖も救
 ふ能はざるなり限星の命宮廟旺又は正限本度は必ず祿
 秩を得る常人は横財及び意外の喜を得る限星の本宮入

福を爲す順に
宜し、禍を爲
す、逆に宜し

廟は算て四年を増し、算て旺興は二年を増す、是其星の本
宮方に臨は斯の如くなるべし、
凡そ五星行限の人宮強發は早く十五度前に入宮し、久發
は遅し、凡そ限本宮に星有り、災福の應は十分、對照は七分、
三合は四分、本宮に星有り、先づ本宮を論じ、次に三合を取
る、對照本宮に無星は、先づ對照を取り、次に三合に及ぶ、若
し限星終末の度在り、則ち災福の徴微は定數を以て之を
言べからず、
凡そ百六大限、竹羅三限は、三限の中に吉凶混雜を見る同
く一宮に聚るは、即ち入宮の先後を以て、及び順逆を以て
禍福を斷む、先づ入宮の深者は、先づ用を得たる後に、入宮
の淺者は後に用を得るなり、

富貴を詳論す
るは、須らく
基を作す有る
べし、

凡そ初て福限を出て、凶限に入るは、其災の發は遅し、方に
災限を出て、福限に入るは、却て漸く享通す、所謂初て吉限
を出るは、尙一二年の刺福有り、統て惡曜を離れ、猶三四載
の餘殃を防か、如きは是なり、
凡そ本限及び三合對照に遇ふ、並に一星を見ず、落空せず
と雖も、亦空限と名く事を圖り成ると無し、若し限主を得
るは、當に強順を生すべし、空亡と雖も、何ぞ畏れん、登科食
祿は皆之有るは、忌と爲すに必せず、惟官祿宮中に落空有
り、行限の最凶は、必ず四十六七歳に死に到るなり、
凡そ吉星生じて、身命を照す者は、中年富貴を主るべし、若
し凶星に逢は、直に限末に至る、始て災厄を見る、若し凶星
を生じ、身命を照す者は、中年に福限に逢と雖も、四旬已後

亦蹇滯して限末方に至て福を爲すべし、大都吉凶の應と全藉根基は有祿を生ずるは則ち吉限上に應ずべし、無祿は吉限亦難徴は是猶無根の木の如く、春に逢と雖も終に葩花の貴を成す能はざるが如し、

行限度要訣論

行限度の事は已に解したる故再び贅辯を俟ずして知ると雖も其運用に至ては熟せざる者は往々誤用する虞在り、其理由たるや各宮値ふ處に由て星辰變化し禍福を異に爲す故、初學は能く意を用ひて精讀を緊とす、其要訣論は左の如し、
限は専ら限主を以て論じ重と爲す、子宮の如きは惟土星

行限度要訣、
行限の説は詳
論を盡して此
編に在り、

を喜ぶ明健の寅宮は惟木星を喜ぶ明健にして尙し宮主
か失躓して凶に逢は、此限厄多し、宮主の入垣升殿して、此
の發福は限中の如し、縦ひ凶星有り、亦合度前後は禍有る
のみ、然るに木亥に居り、金辰に居り、水己に居る、土子に居
る有り、限主入垣は、行限の其中は非なり、惟破家蕩産し骨
肉を分離す、抑且壽此に止る者は、又土星の子丑兩宮に行
るが如く、近く五年此五年生の人、子丑の限を行る、豈に能
く備皆禍を發するや、是故に洞徴は、維限主を以て緊と爲
し、行限尤も度數とを以て詳なり、經緯の脈は終に互に相
往來す、恩度恩通、仇度仇達は、先づ限度の強弱を論じ、又月
令の盛衰主を詳にし、若し盛なれば、則ち度も亦盛を主る
若し衰なれば、則ち度も亦衰ふ、最も緊切と爲せり、立命に

子土を加て主と爲す丑限牛宿度に行るは金に屬し必ず
 穩行なるべし斗尾宿木に係るは是難度なり但木炁の干
 渉を視て躔を得る如何若し木炁星三合正照し或は居垣
 升殿は即ち災厄多を主る水孛星有るか如き木炁木を引
 助し又司令の壽は斗度に止る或は木炁失躔は制を受く
 便ち斗度を主り平安の意を得る行て寅限の難宮に至る
 且つ要は木星の失躔は制を受く箕度は水に屬し水能く
 木を生ず縦は吉亦凶に行り尾度に至る便ち許光霽如た
 り或は木か躔て廟樂に四正を照見し大限の人か水孛星
 に逢は木を尅す木又時を得る寅限の中に決死疑無し設
 し木か地を得るは火羅金計曜有て守照して相制し相接
 る有て引去る木星の禍は許すべし壽を以て發福を許す

べからざるなり行て卯に至るは火を以て主と爲し先づ
 火星の得失如何を看る木炁星卯に在り此木炁は能く卯
 宮の火を主る乃ち難化して恩を生じ反て發福を許す或
 は三合正照し一火一羅有り必ず大富を許す火羅に困む
 如は則ち福輕し若し木炁星卯に居る三方に水孛を見る
 は恩を傷ふ火を尅して水孛星の難を助け生起す木炁は
 但貧寒ならず必ず夭折を主る心房氏宿の三度三般に用
 を取り心度は必ず妻を招き妾を招く或は陰貴に遇ふ房
 度は男女に喜事有り氏度の木炁平々たり辰限に行るは
 金星と木炁星と同宮の如し或は本宮の木度を怕る煞を
 制して吉商と爲す尤度は詞を論じ角宿木度に行る必ず
 重重的の災厄を主る嚴甚の者は必ず死す金星は火度と火

羅とに躋か如し、同く辰限は福を發し、軫宿限の水に至る、水能く木を生し、水星失躋の如く、此限は便ち好し、或は水躋を得て木炁に近し、又本宮を怕る、木度は便ち重福の限を斷む、翼度に至り三方四正は、木炁か單行して水孛有り、相授て、的死す、木炁の限に行るが如し、金計、火羅曜有れば、皆死せず、凡そ限恩宮度に至る皆吉、難宮度は必ず凶、並に此例を以てす、蓋し行限の説を詳論を盡して、此篇に有り、學者輕しく看過る勿れ、

行限度假如

行限度は各宮の値ふ處に由て變化し、禍福の異り現出を述たり、此假如に二十八宿を安命とし、四木度、四

行限度假如、
四木度を論ず

土計は土星計
都

金度、四土度、四日、四水度と區別して、其禍福の異なる事を、更に詳細に示す、左の如し、

假は角、斗、奎、井、宿の安命は、木を以て主と爲す、○四水度を
行る、或は水孛星に逢は、大發跡在り、貴顯の人は之を得る
爵を進め、官を加ふ、○四月度に行る土は、亦好て、金に逢は
吉に化し、火に逢は、發達す、若し土計に逢は、喪服、重重在り、
○四火度に行る、土は金星を見るは、宜しからず、官災、破財
を主る、或は土木造宅を作す、○四日度に行るは、平々にし
て、災禍無し、○四土度に行るは、平坦に發福し、水に逢は、必
定發す、金に逢は、決死す、○金度に、行り救無は、大凶、水孛に
逢は、反て大發を主る、決は禍に因て、福を致す、金星を見る
に、宜しからずして死す、

四金度を論ず

四土度を論ず

納粟有名は、多額の税納者の類を云、又税官使とも云置田は田畑を所有を云、四火度を論ず

又亢牛、婁鬼宿の安命は金を以て主と爲す、○四土度に行るは大發を爲す、○四日度に行るは吉凶相半せり、大凶有るが如きは貴顯の扶を得るなり、○四月四水度に行る、水を見るは發し、悉を見るは孝服を主る、火を見るは高涉の險を登る無し、○四木度に行り火羅に遇は決死す、水有て之を制すは妨げ無し、○四火度に行り土計を見るは大發を爲し、火を見るは必ず死す、

又氏、柳胃、女宿、安命の如きは土を以て主と爲す、○四火を行り四日度は發達して貫し、言を加は否、則ち納粟有名と爲す、○四月に四水度を行るは平平たり、木悉星に逢は死す、火を見るは造宅置田を主る、○四金度に行るは、平々と爲す、○四木度に行るは大凶、水を見る必ず死す、

四日四水度を論ず

又房、虛、昴、星、尾、觜、室、翼、宿、安命の如きは、皆日火を以て主と爲す、○四木度に行るは大發す、○四水度に行り孛星を見るは、落水して死を主る、○四土度に行るは孝服を主る、火を見るは男を生み、金を見るは女を出生す、○四金度に行るは、亦驟に發達すべし、

又心、危、畢、張、箕、壁、參、軫、宿の安命の如きは、皆月水を以て主と爲す、○四火度に行り土を見るは、跌死を主る、○四木度に行るは、平々たり、○四金度に行るは大發達せり、○四土度に行り計都を見るは必ず死す、土に逢は亦好し、○四日度に行るは、平平と爲す、羅喉を見るは酒色の徒なり、或は婦人に因て破財せり、

前論の限命主の尅吉凶は、未だ定らずして全生は何

ぞや、限行主度星の金の如き、必ず金を去て地を得る
 は、則ち吉なるべし、火陷は凶なり、又度を尅す如きは、
 是主元必ず妻元主の、高強は福有り、元主の落陷は禍
 在り、併て此に倣へ、若し限主有り互に相尅破して、力
 罰と爲す、若し則ち主互に屢生ず、他は則ち泄氣と曰
 ふ、凡そ限行は此二度は皆我に益無し、若し行限上に
 入垣升殿は、則ち又利しからざる所なしとす、
 以上星度の其得失を論じて、窮通壽夭を過らす、生尅制化
 を以て此を取る、乃ち其例を擧て之を推し、一概に論ずべ
 からず、木主の如きは、偷し火度に行るは、亦災有り、福有り、
 又水を行て水度、火に行て火度の如きは、前文に載せず、惟
 此二宿は、其氣候を觀て、其時勢を察し、若し火極明を失が

如きは滅し、水極盛は則ち泛ふ、尤も參詳を要す、吉凶星辰
 宮照の有無を觀て、兼て之を斷む、其訣に曰く、更に將に宮
 度の兩參詳せんとす、便ち是人奇妙の術を問ふ、所謂宮主
 生を得て、度主傷を受るは、災有て死せず、又度主の如き所
 宮を得る、主度に双星を合度は、傷ふ亦死す、猶次項の倒限
 論を觀れば、始て其詳を得るべし、

躔度倒限直論

躔度倒限直論

躔度とは躔る度にて、別意無し、倒限とは倒は、什なり、
 戈を倒すの類にて、限を倒す直論なり、此運用は宮度
 に係らず、日を取り用ひて、某歳に何度の下に到る類
 を云、是前の假如より、一層緻密に直論したる者なり、

躑度倒限直論

故に能く意を留め精讀を要す、
 倒限の説は獨り一例ならず此訣は命坐何宮何度を問はず、只日を取り今某歳に行る某限某度の下に到る限行の如き、氏女胃柳宿の四土度中は土を以て限度主節と爲す、元土星の起を見るに何限を得る、或は土起て生に逢は、乃ち尾室觜翼宿の四火度に躑は吉、或は土起て尅に値は、乃ち角斗井奎宿の四木度に躑は、則ち凶と爲す、
 且つ土が四木に躑る如きは、木か四土限に躑る、土度に至るは必ず死す、若し土木躑る所二度中に金炁有て、詳に火羅を解べし、若し金解に會は、是土生金、金去て水を制し害無し、〇若し木炁星同く行るに會は、是二煞は一を攻ず、〇或は土計曜同く躑は、是一煞は二を攻ず、〇或は火羅曜に

戦争は刑尅を云

躑にはか疾速を云

此木を限主と爲し、尅に値を言なり、

遇は則ち是木に因て火を生じ、土の助るを吉と爲す、〇或は水東令及び生旺月は亦解べからざるなり、〇又土が火に躑る如きは、火は土限に躑り、土度に至るは必ず發す、尙し土は火を拜し二度中に躑る、水亭金計を犯すは力疲る、火は水亭に遇て尅土を受け、水亭に遇は則ち相敵なり、〇火は金と戦争にて土は金と洩氣たり、〇土の計に遇は主奴同會と爲す、〇火木炁に會は福厚し、〇火羅同度の夏月生の人、乃ち火炎土燥と謂ひ、之を大躑に失ふ、又云、一母の權争なり、
 且つ木の金を躑る如きは、金は木限に躑る、木度に至るは必ず死す、若し火羅水亭炁星有り、金木二度の中に在て解べし、〇若し火羅木と同く躑る、或は單に水跌に躑る、則ち

此木を限主と爲し、生を受るを言なり、

是水尅火にて、之を灰飛烟滅と謂ふ、木度に行るは亦死す、若し冬令を得るは亦解べし、○但夏月火羅を得る、金度を犯し解べし、○水は金生水、水生木、○炁解は是一煞二を攻ざる理なり、又木の水に躓が如く、水木限に躓り、木の水に至るは必ず發達す、尙し水木二度中に、土計火羅炁孛を犯す者は力を減ず、○木の土計曜に會の如きは相敵なり、○水は土計に遇が如きは相尅す、○木は火羅曜に會の如きは洩氣と爲す、○水の火羅に遇が如きは傷を受く、○木炁星を見る如きは、主奴同舎と謂ふ、○水孛星と同く躓るは、乃ち一母權を争ふ、更に冬生の人に値は、名て雪壓寒梅非と曰ふ、但冬月春生の人、亦宜しからず、○水金と相生を得る其福倍

此金を限主と爲し、尅に値を言なり、

火生金とは、洩氣を云、流布の火尅金と誤る勿れ、

此金で限主と爲し、生を受るを言なり、

増なり、且つ金の火に躓る如きは、火金限に躓り、金度に至る必ず死す、若し土計水孛羅曜有り、金火二度中に在るは解べし、○若し四五月に火羅の生旺は、亦解べからず、○土計の解は、是火を洩ず、火生金と云、○水孛を解は、是金生水、水尅火なり、○羅の解は、是二煞は一を攻ざる理なり、○或は羅曜金度を傷は亦死す、○惟丑牛宿、辰亢宿は非なり、夏月火羅は、倒限と爲すべからず、又金の土を躓る如きは、土の金限を躓り、金度に至るは必ず發達す、或は金土二度中に、木炁を犯す、水孛計は減力なり、○土の木炁を見るは制を受く、金の木炁を見るは抗摘たり、○金の水孛を見るは洩氣にて、土の水孛を見るは戦

瘦は、へる、
やせるなり

此火を限主と
爲し、尅に値
を言なり、
十八月は太陰
を云、

此火を限主と
爲し、生を受
るを言なり、

争と爲す。〇金の水土を見るが如き同く行る、二母争權と
謂ふ、乃ち姑息の太過なり。〇金土計を見る單に行る福力
俱に佳なり、但秋冬は亢生れ二金土に遇ふ、又金埋土瘦と
謂ふ、反は無益と爲すなり、
且つ火の水に躪る如きは、水の火限に躪る火度に至て必
死と爲す。〇孝は火度を犯す亦死す、水炁に孝羅土計曜有
り、火水一度中に在るは解べし。〇八月は反て冬令は亦
解べからず。〇木炁の解は是水を泄し火を生ず。〇孝星の
解は二煞一を攻ざるの理。〇羅曜解はは一煞二を攻ざる
の理なり。〇土計の解は是土尅水なり、
又火の木を躪る如きは、木火限に躪り、火度に至るは必ず
發達す、土計金羅炁有、火小一度在る者は減力なり。〇火

戦争は刑冲尅
を云

此水を限主と
爲し、尅に値
を言なり

は土計を見る如きは泄氣と爲し、木の土計を見るは、戦争
と爲す。〇火は金に會し相尅し、水は金に會して制を受く
〇木は炁に遇て二恩を恩とせず、火は羅に遇て主奴同舍
と謂ふ。〇夏令の如きは、火炎木炁火盛は、反て美と爲さず
〇水の孝星に遇が如きは、展轉し相生は其福最厚なり、
且つ水の水に躪る如きは、土の水限を躪り水度に至る必
ず死す、金は孝木炁計有り、水土の三度中に在るは解べし、
若し土令を得て生助するは、亦解べからず。〇惟五月は忌
す、反て水孝を以て土を傷ふ限は子午土度に至るは凶な
り。〇金解は土を泄氣して、水を生ず。〇孝星の解は一煞二
を攻ざる理と爲す。〇木炁解は則ち是水土と木は、水尅土
にて所謂土を疎し水に縦を曰ふ。〇計曜の解は二煞一を

此水を限主と爲し、生を受るを言なり、

此日を限主と爲し、行星は虚度に死を言なり、

攻ざる理なり、又水の金を躔る如きは、金水限を躔り、水度に至るは必ず發達す、火羅木炁孛有り、水金の二在る者は減力せり、〇水の火羅に會は相敵たり、金の火羅に會は相戦ふ、〇水木炁を見る乃ち泄氣なり、金は木炁を見て仇怒と爲す、〇水孛に會す、主奴同舍と謂ふ、〇水金土計に會す、福を獲る無量なり、〇冬月水冷は金寒、縦ひ相生するも益無し、〇且つ日の木を躔る如きは、木の日を躔る、或は炁日に同じ木の土度限に在り、星虚宿の二度に至る必ず死す、火羅同度に有るは解べし、則ち是木を泄し、火を生じ、虚日を助く、春夏の星度は之を倒限に見る、惟官金星を解べし、又日月に躔る如きは、木の日を躔る、或は炁日同く限を躔

此日を限主と爲し、房度に行れば發すを言ふ、

日を限主と爲し、日虚度は發す、

日を限主と爲し、房度に行る、

る房度に至るは必ず發達す、若し木の日度中に金羅有るは、則ち減力と爲す、金尅木を以て、羅曜を以て、水は泄氣と爲す、且つ日の火を躔る如きは、火の日を躔るは、或は羅日同く躔る、水は土度限が昂度に至るは必ず死す、土計水孛有るは解べし、〇土計の解は、則ち是火は泄氣たり、昂は日金を生ず、〇水孛の解は、則ち火を尅し、昂は日金を護るなり、又日の火を躔る如きは、火の日を躔る、或は羅日同宮限に虚度に至るは必ず發達す、若し日月度中に水孛有るは、則ち減力と爲す、且つ日は水に躔る如きは、水の日を躔る、或は孛日同く日月水火度限に躔り、房度に至る必ず死す、木炁有れば解べ

此日を限主と爲し、昂度に
行る、

此月を限主と爲し、尅に値
を言ふ、

此月を限主と爲し、生を受
るを言ふ、

し、〇水炁の解は則ち是水は泄氣にて、房宿は日火を生ず、
〇木の解は較輕し、〇炁の解は左切なり、
又日の水に躔る如きは、水の日に躔る、或は孛日同躔し、限
主星の度に臨は必ず發す、若し日水度中に、土計火羅曜有
るは減力と爲す、
且つ月の土を躔る如きは、土の月を躔る、或は計月と同
限に躔は、四月度に至る皆死す、金木水孛有り、土月一度中
に在るは解べし、〇金解は是土の泄氣と爲す、月水を生ず
るなり、〇木の解は是土を疎し、月は水を助く、〇水孛の解
は是土に抗し、月水を助く、〇太凡そ夏末秋初は、金令の禍
災は輕し、〇惟畢宿の月度は火羅炁を怕る、之を犯す者は
即死す、若し秋令は最も重し、

又月金を躔る如きは、金の月を躔る、或は金月同躔る、月度
に至るは必ず發達す、若し金月二度中に火羅土計有るは
減力と爲す、〇金の火羅を見るは、金制を受く、〇月の土計
曜を見るは、月傷を受く、〇金の土計見るが如きは、土は
泄し金を生じ、金能く月を助く、倘し冬月寒金冷は、宜しき
所あらざるなり、

此躔度制限直論は、十一曜互に相生じ又相尅し、或は
時旺に遭遇て變化し、一概に斷し難く、所謂生尅制化
なる者にて、是即ち五行の立機の理是なり、故に一讀
の下に明め難しと雖も、其理を感得するに至て、深く
感する者は能く立機を知るべく、若し淺く感する者
唯相生相尅と輕々看過者の如き、輕視者を豈誠めず

んば在るべからず、輕卒の者は遂に眞理を讀て、世に益する事無く、所謂論語を讀て論語識らずの譏を受る者と一般なるべし、

餘奴傷主限論

餘奴の解は前文に明に見ゆ、傷は字書に戕なり害なり損なりと在て、主限を傷を云、主限とは四柱中の主と成る限を云、故に其主限に傷ふ事を詳論せし者なり、
^余は四木度を躓る如きは、^則ち木を傷ふ、^或は木炰同く躓る之を餘奴主限を犯すと謂ふ、木度に至るは決死と爲す、水亭金有て木度在るは解べし、○水亭は能く木を生じ、金

餘奴傷主限論、此字は限主限を論、此字は限主限を論、主を犯し、かて反て四木度に行るを論す、

此字は限主を論、此字は限主を論、犯し、かて反て四木度に行るを論す、

此羅は限主を論、此羅は限主を論、犯し、及び四土度に行るを論す、

は能く炰を制すを見る、○秋月は斗角井度の如きを最も忌む、○奎度は解べし、餘月は亦同し、
^亭星の四木度を躓る如きは、^水を傷ふ、^或は水亭同く躓るは、^{所謂}餘奴主限を犯すと曰ふ、^水度に至れば決死とす、^惟參壁箕度は之を忌む甚し、○軫宿を犯す禍災は輕し、^當に水敗は時を失すべし、^皆令を忌ず、○木炰土計有り、^水度在るは解べし、○木炰は能く亭を泄す、○土計は能く亭を制すなり、
^羅は四火度を躓る如きは、^火を傷ひ、^或は羅火同躓るを、^之を餘奴主限を犯すと謂ふ、^火度に至るは決死す、^惟尾室の二度は極て之に遇を怕る、○翼度は禍災輕し、^惟正三四六八九十月は之を忌む切と爲す、○水亭は木炰有り、^火度在

此計は限主を犯し、及び四土度に行るを論ず、

るは解べし、○水字は羅を尅す、○木炁は火を生ずるなり、計四土度を躪る如きは土を傷ふ、或は計土同く躪る乃ち餘奴主限を犯すと爲す、土度に至るは決死なり、火羅木炁有て土度在るは解べし、○火羅は土を生ず、○木炁は計曜を制す、
度は餘奴主を傷ふ、傷の要は正度を傷ふ、並に諸星相犯す無し、或は流午の奴星を見る、度を犯を以て倒限を主る、○假は限行の木度に太陽、陽、飛、又、劫、煞、天、雄、地、雄の如きは、其宮に至る者必ず死す、餘は此に倣ひ推さは百發百中なり、
凡そ諸星の令は死を怕れ、剋を怕れざるべし、只泄氣を怕る、水生木、木生火の如きは、我去り他を生ず是なり、凡そ一

星禍を爲し、諸星皆助く倒限を定む、金木の如きは木を限主と爲し、土計の黨煞に傷らる、眞金は双を掌る、神に値ふ
凡そ日度は單に羅計木炁を犯す者は、皆倒限に當る、是處、房、日、凡そ行限度主に傷を受く、宮主は亦傷を受く、之か倒限に逢ふ、限度主と限宮主と若し宮主傷を受る、度主は平靜なり、但双星合度に逢は、亦倒限なるべし、死せずは、若し度主に傷を受るは、宮主生を得る、但災は在るも死せず、亦宮に合有るも亦死す、金星、羊、双、土は且つ又倒限なり、然るに双星合度を須て、或は双度に行るは、皆凶事を用ひて宜く、輕重を詳にすべし、羊、双、有るは重し、羊、双、無は輕しと爲す、
凡そ看命五星の生を得る如き、必ず剋度有り、如し限行、木、火、土、金、水、度は、皆一度も傷を受る無し、或は餘奴傷主度有

且つ春令の如きは木度に行り、夏令の火度に行り、秋令の四木度に行り、冬令の四火度に行り、辰戌の三月九月に四水度を行る是なり

○餘奴傷主限論

るなり、剗度無が如きは、只令星他星を尅し、度方は倒限なるべし、又餘奴無く主度の傷は、只令星を看るに某度を尅す者、頂度に行る處は、亦死を言ふべからず、二十八宿の如きは、皆仔細逐一に察するを要す、若し一星失陷有るは、定て災厄を見る、角木亢金、氏土房日、心月、尾火、箕水等度の如し、倘し一星傷を受る有れば、一星尅限を受け、水度に至るは、疾病に非ざれば、則ち危し、假は金翼火を躓る如し、火は亢金を躓る之を金強火弱と謂ふ、災在て死せず、翼宿は是月中の火なり、故に弱亢宿は金宮の金と爲す、乃ち強し、又金室宿火を躓る如きは、火婁宿金に躓る、倒限疑ひ無し、室宿は水中に火強にて、婁宿は火中の金弱なり、餘は此に倣ひ知れ、

一四四

殺と煞と同じ

殺亦倒限論、甲丙戊庚壬、陽と爲し、乙丁己辛癸を陰と爲す、尅、殺戦は殺と刑

殺亦倒限論

殺刃とは殺は凶煞を云、刃とは羊刃陰刃飛刃等を云、是皆凶星なり、倒限の事は前に解見ゆ、凶殺羊刃等の倒限を論じたる者なり、

倒限の法は、直指篇中に載盡せり、然るに其間亦未だ其度に至らざる有り、死す者乃ち之を凶迎と謂ふ、或は其度を過て死す者は、乃ち之を凶送と謂ふ、或は死に當て死せざる者は、蓋し殺有て羊刃無し、死に當らずして死者有り、乃ち羊刃有て殺無し、陰陽二刃の平たるを看るべし、更に源流二刃に會て斷を爲す、若し原年の刃を犯し、流年の刃及び殺戦有るは、決死疑ひ無し、若し刃無く殺無くして、豈に

○殺及倒限論

一四五

殺は尅限度の
星又は双宮又
度を殺中の歳
又と曰ふ、又
若し双度の金
に逢ふ、金星
は殺名對を
主なるなり、

能く命を傷ふ、經に曰く、晝生は羊、双を忌み、夜生は陰、双を忌む、反て此或者は死せず、又二双迎送有る者は雙、双有り、命限を拱夾する者は、双星相衝く及ひ尅限有る者は必ず死す、命限に二双の宮に座す有り、或は二双星守の命限の位に限宮主傷を受る有り、双星合限度主は亦死す、限度主尅を受る有て、双星に合限宮主は亦死す、双中に殺を包有り、殺中に双を包か、又双中に双有る有り、強弱限宮限度を辨ずべし、二主の強者は生し、弱者は死すなり、且丙戌生の人の如きは、陽、双、午に在り、飛、双、子に在り、大限、午子に行る二双と爲し、午屬とを言ふ、日に子、尾、土、星、柳、虛、女、宿、を、双、度、と、爲、す、若、し、柳、星、虛、女、度、内、に、木、炁、有、り、木、炁、は、乃、ち、土、日、の、殺、即、ち、是、双、中、に、殺、を、藏、む、或、は、土、は、日、度、の、内

に金有り、是双中に双有るを謂ふ、對合四正も亦然り、また甲乙庚辛生の人の如きは、卯戌辰酉を双宮と爲す、火金を双星と爲し、火金二度に行る、若し水、火、羅の關を指す、是殺中に双の藏ると謂ふ、若し此者は皆之を忌む、歌訣に曰く、且つ二双若し然るに命限を夾み、陽、双、飛、双、が命を夾み、限を夾は、強弱宮中に天定る所、宮度主の強宮度主の弱は、還て他強の者は、是機を具ふ、宮度主強者は生し、弱者は必ず天に、貴泉境に宮度主の弱者は死す、宮主は傷を受け、双の合度宮主は傷を受け、双合度は死す、度主の傷を受る、双宮は死す、度主は傷を受け、双合宮は死す、更に兼双殺兩は同じ、未だ宮度主の傷は、双殺に遇ずして、連ることなし、送關中に難に値は、厄星伯に取る、誰か迎送の者は

死す、双合度方は又合身にて若し双度双星に行り、守命夾限夾身の首尾を看る、双星夾命夾限は必ず死傷し、前を衝き後に暗合し來る、前後俱に双の限を傷ひ命を尅し、四正互に加る、皆許さす、四正の双星か互に加るは亦死す、

宮度倒限論

宮度倒限論
煞は限度星を
尅し、双は陽を
尅し、陰刃、飛
劫、殺、又、又、
劫、又、度、に、宜、し、

宮度とは各宮に皆宮在り、其宮度の倒限を仔細に論じて、吾人の禍福を精密に知る爲なり、
倒限の法は須らく度を詳論すべし、煞、又、有て太歳に遇は、必ず傷ふ、煞、又、星無は縦ひ凶なるも死せず、○子宮に尾宿月土計曜を嫌と爲す、虚、女、宿、土、度は木、炁、眞に凶し、○丑宮に斗宿木金は亦憂と爲し、牛宿は金土に從て獨り炁曜を

若し流年太歳
の合沖を照す
如きは、生死
を決す、限宮
限度の如きは
傷を受く、原
守は若し流年
に、双に無し、
太歳を相犯す
無は死す、
又、午宮張度は
太陽を照を言
ふ、故、木、炁
を怕るなり、

害と爲す、○寅宮に箕宿水は水木兩ながら土に取る、當に火合の水弱は必ず傷ふべし、春冬に逢が如し、又、殃と爲さす、尾火兩界の寅宮は木に屬す、最も秋金を怕るも水孛は禍ひ輕し、○卯宮は尾初の羅水は必ず死す、心宿月は土房宿を忌み、火度に從て、水孛月氏宿土の火垣を忌も、木弱は尅せず、○辰宮は氏度の木炁は必ず傷ふ、亢宿金の堅實は火羅を忌まず、夏令に逢を怕る、角木は枯焦し、専ら羅火を嫌ひ、金を亦憂と爲す、軫は吉辰巳の兩界にて、土計は能く炁星を傷ふ、又能く奪て辰宮の軫宿を藏む、○己宮は軫宿水にて翼宿火、水頃は冬を嫌ふ、土計の張宿寅は亦土を見るを愁て、殃と爲す、○午宮の張宿月は木炁土計は皆凶星、日太陽は却て、木羅を忌む、柳宿は木炁を怕る、○未宮柳宿

兼月は惟土計鬼金を忌む正垣は計羅曜を憂ふ井木兩宮は計土を懼れ又金旺を怕るなり○申宮は參宿奴孛を嫌て土を見るを亦憂ふ觜宿は計炁星を忌て災を爲し畢宿は申西方に在り最も計炁と土胃宿を怕る○酉垣は昂日胃土に木を見るは凶と爲す○戌宮は婁宿金の大殿又水孛を忌む設ば夏令に逢を最も噴る羅喉は金中に金炁皆是凶神なり○亥宮は壁宿は土を忌み又奴孛は室宿火を怕る木垣は金羅と並に凶殺なり若し其度に同く行れば以て利と爲さず

夫れ貧富生死を見る易し難は一般の難星有るを謂ふ一生一死は一般の行限に有り一存一亡は必ず命何度に躔を見るべし更に虚實時候晝夜生旺死絶の方を詳にし

て其禍福を論すべし土命辰宮の如きは金を以て主と爲し怕る所の者は限南方に至て火羅に遇は必ず死す或は死せざる者有り若し命度主は是亢金にて前に火羅に逢は晝夜を分たず時候の援無き者は必ず死す或は角木に躔る前に火羅に逢は却て又司令と不司令とを見る晝夜生共に必ず死す時に夜生有るは死せず命軫度に躔る如きは亦此例に依て斷ずべし又立命の辰土計恩星の如き限を守照して火羅に逢は甚だ必死なり或は火羅稍弱は決す倒限なるべからず又一般難星の如きは必ず先づ空亡陽及破碎を見るべし空亡有る者は死せず蓋し詳に凶中に吉有り吉にして凶は淺し一概に論ずべからず

又命立寅亥の如きは怕る所の者は金と爲す或は金三方

四正に居て救援有る者は不死、或は金己酉丑の三方に在り、命限を照を見る、蓋し巳酉丑は皆金局なり、縦ひ援有る甚だ親切ならざる者、必ず倒限に一般凶星有るは、行限に悪死有り、正死天死は、必ず從て當に神煞を生ずべし、正度に之を定む、所謂凶に臨て、煞轉する是なり、吾打死、疾厄、羊刃、破碎、官符、血刃等星に從て、當に化曜を生ずべし、息命の上、に治め、斷を取る、横事、惡死の如きは、提飛廉上に斷を取り、水溺、惡死は、伏尸、欄杆、捲舌、貫索、陽刃、浮沈、凶殺の上、に斷を取り、空亡、解神、救文に遇が如きは、俱に亦之を解べし、高壽は、限度を以てすべからず、定止る難星土に從て、用を取る、若し難星俱に傷を受く、日主は、高壽なり、立命辰金の如きは、火羅を主と爲し、亦難と爲し、火は、水尅せらる、羅は、李

提は提綱にて
月令を云

尅を破る、各皆制的を受て、高壽を許す、縦ひ、限難度到るも、亦害と爲さず、或は火水尅せらる、が如し、羅難に制無壽を斷むべからず、必ず二難制方を受く、之を能く知るべし、

太陰太陽倒限論

太陰太陽も倒限に由て、禍福を異にして、禍福を現實する故、其値處を詳細に論する左の如し、

凡そ子宮の立命は、危宿、月燕を躑り、度限を行、外房、宿日、兔度に至る、三方、四正に、吊合、飛來し、並に、惡曜無し、禍を爲して、忽然死す者、有り、術者、其理に、明め、す、但、以て、禍福を爲す、準し、からず、殊に、太陰を、知らず、日出の、受る、所に、至る、彼、極陽の、反亢なり、若し、虛宿、日鼠、女宿、土蝠、度は、卯限に行り

太陰太陽倒限論、
經に云、子午は、乃ち、是、黃來、
呼て、一、八、回、と、
爲、と、は、此、之、を、
謂、なり、

〔燕は寅方を
云〕
日兔、日鼠、
十蝠、土獾、
月鹿等は是皆
天禽、稱なり

止る、是刑尅破碎或は官符災病のみ傷盡に至らず、午宮の立命は星宿日馬に躓る度限に行り酉畢月鳥度に至る、忽然死者有り是太陽極陰の地に至り陽盡て陰絶す二八の門に入る安ぞ活べけんや若し柳宿の土獾張宿の月鹿度を
を行る如く此に至て亦只陰晦災傷暗侵の怪事在り或は
父母を刑傷し或は自ら張の患難の疾は連年瘳ず未だ便
ち其大壽を損すと斷むるべからず學者宜く仔細に之を
詳にすべし、
以上行限を數項に分ち詳論し盡し在り、學者は何に感ぜ
しや、五行の眞理たる是則ち死生の性命の大事を知る實
に生尅制化に有るを反覆叮嚀に論じたる者なり、然れど
も眞理は入易き様にて却て明め難き故に、能く研磨を努

め其妙機に至るを期すべし、

天命
造化之樞機
卷之一(了)